
蒼いパレット

黒薔薇姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼いパレット

【Nコード】

N1120K

【作者名】

黒薔薇姫

【あらすじ】

早坂先生のお休み中、私（葵）は文化祭に出展する作品の制作に全力を傾ける一方、早坂先生が恋しくなる。そんな時、私は街でばったりと先生に会いひと時を過ごす。私はますます先生への想いが募りそれはやがて次第に…

第一話（前書き）

私は偏差値のあんまり高くない高校の2年生。

友達が彼氏に夢中になっているのを尻目にバイト、ソーシャルライフそれに部活の美術部で大活躍。

そんなある日、わが美術部に若い男の先生が顧問として赴任して来た。

見た目はどうってことないこの美術教師に私はいつの間にか惹かれていく。

恋愛にはひたすら頭でっかちな私がひょんなことからこの先生に接近、そしてそれが思わぬ展開を見せる。

ぶっちゃけた文体とあからさまな心理描写はきつと読者をにんまりさせるでしょう。

第一話

めずらしく雨の日が続いている

こんな日はふっと高校生だった頃を思い出しちゃう

日本の気候は雨が多かったから（今も？）そんな風におもうのかな。

二年生に進級して私は心から高校生活エンジョイしてた。一年生の時ほど緊張してないし受験もまだチョイ先、校則では一応バイト禁止なのに二年生でバイトしてないっていう子は赤ちゃんか体育会系女子かってくらいのもったたりした校風だったから部活とバイトを掛け持ちなんて子はザラだった。

もちろん私もそのうちのお一人

オシヤレしてクラブ行くのも社会勉強するのにもバイトは必要不可欠、本屋さん、喫茶店、ケーキ屋さん、時給がよければなんでもござれ。

部活は一年の時から美術部と一貫してたけどね。

美術部に入ったのは絵の才能があったから。

じゃなくて……。

ただ絵を描くのが好きだったから。バイトする前、一年生の時はもって熱心だった。

ついでに芸術の選択も美術、他の授業の間でも退屈すると描いてた。

常任顧問の本條先生は厳しくて部員の作品を褒めた事なんかないような先生。

まあ芸大出てるから私たちの落書きに毛の生えたような「芸術」観て感動するわけないんだけど。

成井先生は年配の先生でたまに顔を覗かせて部員をおちよくる。ほとんど準備室に籠もって自分の作品を作るのに忙しそうだった。

その日も私たち部員は部室に入るなりアイスクリームを食べなが

らアイドルとか試験の話しなんかしてたんだろか、どの部員もイーゼルを出したただけでお喋りに興じていた。

油絵の具の匂い漂う部屋に本條先生の後について見知らぬ若い男の人ふらつと入ってきた。

女子ばかりの部だったから男の人といえば教職員か学校に出入りの業者さんくらいしか顔を出さない。

おおかたフィキサチフを乾かす機械の修理屋さんくらいに思い「こんにちはあゝ」と間延した挨拶をすると「この子達が美術部員ですよ、お喋り倶楽部みたいでしょ」本條先生がその男の人にヤレヤレという表情を向けた。

「こちらは今年から非常勤講師として美術を担当してくださる早坂先生だよ。先生は西洋画を専門にしているからよく見てもらいなさい」私達が顔を見合わせてクスクス笑うと本條先生は四角い黒縁のメガネを人差し指でツイと上げ、男の人の肩に手を置いて言った。

「初めまして、早坂隆です。皆さんよろしく」早坂先生はその場にいた十二、三人の女子部員を見てちよつと照れくさそうに挨拶した。早坂先生はヤマアラシみたいなボサボサした髪にアイロンも当ててない様なシャツ、それに色褪せた黒いジーンズという初出勤日にしては到ってラフな服装だったけど涼しげな眼が印象的だった。

「みんなのスケッチブック見せてくれる？」一通り部員達の自己紹介が終わると早坂先生は広い机の周りに私達と座って言った。

「えゝ、下手だからやだあ」山下先輩が言い、

「恥ずかしいゝ！見せらんない」さくらがスケッチブックをピシャリと閉じると先生は言った。

「まだ高校生なんだから下手でもいいんだよ。自分で上手いと思ったらそれ以上に上達しないだろう？」

まあそうなんだけど 自分が一番に見せるのはイヤなの。美術部員はそういう面ではシャイである。

「ゴチャゴチャ言っていないで見てもらいなさい！」私達がゴネてると部長の今白先輩がピシャリと言った。

今白先輩って美人で気が強い。

先輩はさっさとスケッチブックを早坂先生に差し出した。

早坂先生が先輩のスケッチブックを開いてひとつひとつのデッサンを見ている間、何人かの部員も先生の傍で「うまーあい！」「さすがあー」なんて感嘆しながら見てた。

「さすが部長さんだね、今白さん上手いなあ」早坂先生も感心した。他の先輩が「キヨちゃん（今白先輩）の後だとみんな引いちゃうもんねー」なんて言いながら先生にスケッチブックを手渡した。

ページを捲りながら「このメディチ像なんか…なかなかいいよ、やっぱり三年生だよな」と先輩の顔を見て言った。

先輩はちよっと嬉しそうに「はい」と頷き「次は葵ちゃんの番よ。

この子上手なんですよ、先生」

と隣りに座っていた私を指名した。

先生は私の画集を取り上げ 表紙を開くと「あれ、これ誰のサイン？」

私はカッと顔に血が上った…。

「葵の王子さまだもんね、ジョン様。 先生、ボン・ジョビのコンサート行った時葵のキャーっていう声すごかったんですよ」さくらが私の顔を盗み見て言う。他の部員達もニヤニヤしながら

「ジョーン！」と囁し立てた。 ああ、恥ずかしい…。

「ファンなんだ。俺もロック好きだよ A C D Cとかヴァンヘイレンなんかさ」ニコニコしながら先生は私の習作、スケッチブックのページを捲っていった。

「葵ちゃん、うまいね」何人かの部員が褒めてくれたけど先生はただ黙ったままデッサンを見ている。

「なんか言ってくんないかなあ…」顔の火照りが引くと私は先生の批評が気になった。

「津田さんの…こういう線さ、ちよっとゴチャゴチャしてるね、鉛筆貸してくれる？」

今白先輩が脇からサツと4Bの鉛筆を差し出すと先生は私のスケッ

チブックの余白に鉛筆を走らせ始めた。

ついと先生の手元を見て私はドキツとした。

大人の男の人の手……。

芸術家の手ってこんなに男っぽい手かな。

今までどの先生にも、っていうか男の人の手なんか関心なかったのに早坂先生の白いけど意外に骨っぽい手を見て胸が騒いだ。

それに先生のシャツの袖から伸びた腕にも大人の男を感じちゃったりして。

「ほらね、君が描いた影よりこうやって同じ方向に描いた線で影をつける方がすっきりするでしょ」先生は私の目をのぞきながら修正をしたデッサンを差し出した。

不意を衝かれた私は「はぁ」と先生の鉛筆描きを見た。

ちよつとの違いなのに鉛筆のストロークが変わるだけで段違いに見えた。

早坂先生って上手だな。それに：私は先生の描いた鉛筆の線をいつまでも見ていた。

石膏のデッサンが終わった後、描きかけの油絵にとりかかったけど早坂先生のこと気がなくなって思うように筆が運ばなかった。

家に帰り、二階の自室へ行こうとする私に後ろからお母さんが声をかけてきた。

「うちの婦人会のタエコさんが今夜、葵ちゃんにお店手伝ってほしいのですって、できる？ 葵ちゃん」

タエコおばさんは駅前で“小料理屋”をやっていて店が普段より忙しいときや雇いの女の子が休んだりすると私に手伝いを頼んだ。

小料理屋というより飲み屋と言った方がピッタリなおばさんの店は中年のおじさん連中がお客さんのほとんどで、自分の娘みたいな年頃の私はお客さんから結構可愛がられた。

「タエコさんは水商売でも堅い人だから」と母は言って別に断りもしなかった。

お婆さんは気前がよくてそこらのバイトをするよりお金はよかったから私は喜んで引き受けた。

一学期の期末テストが終わると後は楽しい夏休みを待つだけ。ほとんど授業に身が入らなうい。

芸術の授業は本條先生が担当だから一応きちっと出ていたけど内心、早坂先生だったらなあうなんて思ってた。夏休みの間も部活は一応あるものの、朝から晩までやるわけではなし運動部のように試合があるわけでもない。部活の友達とみんなで泊りで海に行こうとか、デイズニールンド行こうとかそんな話で盛り上がった。

そんなある日、私は親友のリサ子から大変な話を聞いた。リサ子はバイト先のファミレスで知り合ったKという大学生ともう一年も付き合ってた。

「葵ちゃん、あたしね、妊娠しちゃったみたいなんだ」

リサ子は膀胱炎にでも罹った、みたいなレベルで話をはじめた。

「ウッソー、リサ子、それなんかの間違いだよ。そんな簡単に妊娠するわけないじゃん」

リサ子が彼氏とお泊りしてる事もそーゆー仲なのも知っていたけど、まずありえないと思う。

“十代の妊娠”なんてティーン雑誌のスペシャリティみたいだけど、フツ―は滅多にないんじゃないの？

「葵ちゃん、あたしマジでやばいんだ。生理もう2週間遅れてるし。Kさんにも言ったらね、一緒に病院行こうって言うてくれた」真面目で責任感強そうだもんね、Kさん。

「あたしも一緒に行くよ」

親友の重大事件に関わらないわけにはいかない。

「ありがと、葵ちゃん。でも大丈夫、Kさんが付いてるから」

リサ子が弱々しく微笑んだ。

そっか、親友の私より今一番居て欲しいのはKさんなんだ、リサ子が頼ってるのは。

まあ、状況が状況なだけにそうかもしれないけど。

中学の時から親友だったリサ子がちょっと遠くに行ってしまったように感じた。

そういや麻里だってスーパーのバイトで知り合った十五歳も年上のおっさんと付き合いだしてから私達とは付き合い悪くなったしなあ、女の友情ってこんなものなの？

彼氏のいない私には友達より彼氏っていう彼女達がわからない。

それって私がガキっていう事だろうか？

飲み屋さんでバイトしてこれでも結構大人の世界は見てるつもりなんだけど。

大人通り越しておやじの世界かなあ。

その夏リサ子は妊娠した子を堕した。

電話の向こうでリサ子は泣いてた。赤ちゃんが欲しかったからではない。

大好きな人との子を堕さなきゃなんなかったからだ。

心も体も痛かったに違いない。

麻里と私はリサ子を見舞った。

リサ子は顔が蒼ざめて少し痩せたみたいだった。

「Kさんがガキだからリサ子がこんな目に遇うんだよ、避妊くらいちゃんとするのが大人ってもんじゃないの」リサ子を見舞った後の帰りの電車の中で麻里が憤慨した。

「そうかなあ、でもさ失敗する事もあるんじゃない」

実体験のない私にはKさんを責めてもしようがないように思えた。

リサ子みたいな目に遭うんだったら私は男の人と寝たくなんかないとつくづく思った。

夏休み中の部活は毎朝8時半から始まってお昼過ぎには解散ということになった。片付ける時間がお昼過ぎだという事で特にはつきりした時間もなく、まあきりのいいところだというのんびりしたものだ。

『文化祭に出展する作品もそろそろ手掛けなさい』と本條先生からお達しがあったのでポスタのデザインを考えたり“展示するにふさわしい”ものをこれまで制作していなかった部員は急に忙しくなった。そんな中、早坂先生は非常勤なのに戌井先生よりはずっとまめに学校に来てくれて私たちの作品を見てくれたり指導してくれた。

ある朝 私はめずらしく時間より早く学校に着いた

「おはよう。今日は早いんだね」振り向くと早坂先生だった。

私は夕べの出来事を咄嗟に思い出した。

夕べはバイトの最中にタエコおばさんのお使いでスーパーマーケットに行ったのだ。

しかも夜遅くなってからだった。

お店は繁華街の中にあるからスーパーまで歩いて十分とかからない。そこでバツタリ早坂先生に会ったのだ。

先に声を掛けてきたのは先生だった。

「やあ、こんな晩くにお家の手伝い？」そう言いかけてから 私が着けていたエプロンに気づいて

「ああ、バイトしてるの？」

マズっ！タエコおばさんのお店の名入りエプロンを見られちゃった。

「いいえ、母の友達のお店の手伝いで……」

飲み屋でちよいちよい働いてるって事は知られなくなかった。

「そいじゃ、失礼します」

あたふたとスーパーの袋を？むと店を出た。

なんだか如何にも悪い事してるのを見つかっちゃった！みたいな態度とってしまつて。

なんでこうなの、私。

自己嫌悪に陥った。

早坂先生が相手だとなんか調子狂っちゃう。

何日か前もそうだった。

部活のとき、石膏デッサンのバランスを取ってたら先生が隣りに来て私の目線の高さに屈んで鉛筆で離れたところにあるモチーフの長

短を計りはじめた。

私は先生の横顔、よく通った鼻筋から男の人にしては少し赤い唇、爽やかな剃り後のあるあごの線、のど仏の辺り……つい見つめてしまった。

先生のつけてる微かなパフュームが体温と混ざった匂いに私は眩暈がしそうだった。

「もうちょっと……こうかなあ……？　　どう思う？」先生と私の目が合った。

私はゴクリと唾を飲み込みたいほど息苦しかったけど飲んだら大きな音が聞こえちゃうんじゃないかと思ってただ頷いた。

『どう思う？』って訊かれたんだから何とか言えばよかったじゃない……。

「先生のパフューム、萌えます、何使ってるんですか？」まさかね。

もしかして私、先生に恋しちゃったとか？

キヤー！　　つーか最初に見たときから私先生に“♂”を感じてなかった？

エエッ？　　やめようよ、そーゆー事言うの恥ずかしいじゃん……。

「夕べ　晩かったんだろう？家に帰るの。バイト何時に終わるの？」先生がちよっと心配そうに言う。

「そんなに晩くないですよ、帰りは送ってもらってるし」うそばかり、大抵は深夜なのに。

「先生、学校に言いつける？」

ケーキ屋さんとか本屋さんのバイトなら平気だけど場所が場所なだけに気になった。

「オレそんな野暮なことしないよ。バイトしてる子、言い咎めたらきらないだろ。悪い事してるわけじゃないし」

非常勤講師の気軽さなのかな？　　先生話しわかるじゃん。

「Great White」の“This is Love”の

サビの部分进行思い出しながら私は心の中の早坂先生的存在を持て余していた。

部活に出れば先生と会えるとは言え“先生と生徒”として話す以外には何もできない。

それに先生と話そうとするとドキドキしちゃって気の利いたことが言えない。

そんな自分が不甲斐ない。

「ねえ 早坂せんせってどうよ……」部活の帰り麻里にぼそつと言ってみた。

「別にイ、でも本條先生よりいいよね のんびりしてるしさうるさくないじゃん。でもあの髪 of 毛さあ、どうにかしたほうがいいよね」麻里は全然気づいてないんだ（ホッ）
おっさんと交際^{つきあ}ってるわりには鈍いじゃん。

「なんでそんなこと聞くの？ もしかしてさあ、好きなんじゃないの？ 葵ちゃん早坂先生のこと」

わわわ、やっぱ知ってたあ。

「わかる？」わざとシラツとして言った。

「だって葵ちゃんこの頃部活まじめに出てんじゃん」
あ、そーゆーことね。

「なんで早坂先生？ 他にもイイ男いっぱいいるじゃん」

麻里はクラブで私に声かけてきたオシャレな男の子達のことなんか言ってるのだ。

それはわかる。学校のような日常生活のシーンで恋を見つけるってなんかレイジーなふるまいだね、あんまりオシャレじゃない。

でも麻里やりサ子みたいに職場恋愛、バイト先の中でだって日常生活とちがうか……？

「葵ちゃんマジ？ ホントに早坂せんせー好きなの？ 意外だな、あの先生って全然オシャレじゃないじゃん」

私ってそんなにデザイナーブランド男が好きに見える？

「そこが逆にそられるっていうか……」

「なんかあのシワシワのシャツにアイロンかけてあげたい、みたいな？」

「うーん、わかんないけど」

大人なのに母性愛をくすぐるっていうか、そんな感じなんだろうか。とにかく胸がキュンとなるのだ。

「そうなんだあ、じゃ協力したげるからね」麻里が任せなさいっ！てな調子で言う。

「みんなには言わないでよ、公認みたいなのヤダからさ」さくらなんかはきつと騒ぎ立てるだろう。

「じゃさ、今度先生の誕生日聞いてプレゼントあげなよ」月並みなアドバイスだけど、それくらいから始めるか。

続く

第2話

文化祭のポスターはシルク・スクリーンを使って創る事に決まった。これは去年 今白先輩がみんなに先立って提案したのだ。

「今白先輩の時よりカッコイイのを創ってやろう」とみんな思ってた。

一学期までは三年生の先輩達が君臨していたから、やたらと私達は今白先輩にねじ込まれてた。

三年生が受験で部活からひっこんだのを機に二年生台頭というわけだ。早坂先生は去年のポスターを見た。

「これ、むずかしかったんですよ先生。時間もかかったし」

新部長のカンちゃんが甘ったれた声で言う。

「初めて作ったの？ ふうーん」

あんまりではよくないか…

「今年のもっとカッコイイの作りたいよ」私は先生の傍で言った。

「どんなふうに？」早坂先生は興味深そうに私を見た。

「もっと前衛アーティストみたいな…」

私は全然図案なんか考えてなかったから適当な思いつきで言った。

「そういう津田さんはちゃんと図案考えてるわけ？」

本條先生が疑わしそうに私に言った。本條先生は美術部員達と付き合いが長いから、私が先生や文化祭実行委員にせっつかれないと腰を上げない呑気な性格をよく飲み込んでいる。

「去年とは違う雰囲気を作りたいんですよ？」

早坂先生がニコニコしながらフォローしてくれた。

先生のこういうところ、好きだな…。

「じゃ、画集でも写真雑誌でもいいから資料参考にして、ちょっと考えてよ。」

早坂先生、準備室にも使えそうなのあったら出してきて」本條先生

はいつの間にかその場をしきっている。

「はい…」 早坂先生が一人で準備室に向かうと麻里が私を肘で突付いた。

「葵ちゃん、ほら あんたも！」 麻里が私の耳元で囁いた

「あつ、あの…先生、あたしも行きます！」

思わず声が上ずったのを皆にバレやしないかと一瞬周りを見回した。とりあえず皆は本條先生の説明を聞いている。私はバタバタと急ぎ足で早坂先生の後から準備室に入った。

麻里さすがー、頭いいじゃん。先生と二人つきりになれるチャンス！
ってもう資料のことなんてすっかり忘れてる。

準備室は先生達の描きかけの作品、本條先生の彫刻っていうか“スカルプチャー”ですか？ それに画材やモチーフ、その他雑多な書籍類が山積みになりカオスと化していた。 早坂先生のお部屋もこんなのかなあ…。

「足もと気をつけろよ、あつ、それまだ乾いてないから触んなよ」
早坂先生が本棚の前のハシゴに足をかけながらキャンバスのひとつを指差した。

「これ先生が描いたの？」

激しい赤と黒が基調のちよつとなんだかわからない中に羊だか山羊のような動物が描かれてある絵だ。

「うん。津田さん こういうの好き？」

先生が訊いた。

「好き？ あんまりわかんないな、こういうの」
正直すぎるぞ、葵。

「そっか、津田さんはどんな作家が好きなの？」

ハシゴに載ったまま先生は本棚の本を引きぬきはじめた。

「んー、シャガールとかモネ ユトリロも好きかな」

私の好きなアート聞いてくれた。

「もっと前衛的なのがすきなんじゃないの？」

先生はさっき私が本條先生に突っ込まれたのを思い出して笑ってる。
「それはポスターを作るときの話で、人の目を引くものじゃないと
…そう思っただけです」

先生は分厚い画集を一冊づつ私に手渡しながら

「なんだあ、オレのこういう絵も好きかなって思ったのに」
えっ、なにそれ…？

なんかまずいこと言っちゃった？

マジで？

『もちろんです。早坂先生、私こういうの大好きですよ！ 自己表現衝動を抑えながらも作家の叫び、苦悩がそのままキャンバスに叩きつけられていますよね。イメージとコンポジションは大胆なのにディテイルの色彩の絡みが微妙で斬新。このモチーフの動物の抵抗感が全体をさらに引き締めて盛り上げてますよね』
…とは言わないまでも

『先生の作品って破壊的ですね、この色彩ってイメージとコンポジションを殺してません？ それとこれ、羊？やぎ？ なんでこんなモチーフにしたんですか？』

…違った！

準備室でせっかく先生と二人きりになれたのに これといった進展はなかった。

当たり前か…

それに、先生の絵はちよっとお…みたいなニュアンス残しちゃったしな。

ってか そういう意味じゃなかったんだけど そういう風にとられちゃったよね。

あーあ、なんでもうちよっと気の利いたこと言えないんだろう。

リサ子にその日の準備室のことを話すと彼女は言った。

「葵ちゃんが早坂先生の作品気に入ってくれなくてガツカリしたかもよ」

もう 遅いんだよ…

ってか、私の批評なんて別に気にしてないんじゃないの？

「芸術家って自分の作品褒めてもらったらうれいんじゃないかな。上手い下手って評価するんじゃないくて 単純に“そういうの好き”って主観でいいからさ」

リサ子は軽音部に入ってた時々ロマンチックに詩を書いて見せてくれるから

彼女の言う事は当たってんなーと思った。

主観の問題ね。

恋もそうだよな あくまでも自分が好きだって それだけだもの。

「ねえ、早坂先生って彼女いるの？」

リサ子が言った。

はあ？ そんなこと考えたこともなかった。バカだねー私。

好きな人に彼女がいるとかなんも考えずに 一人で舞い上がったたよ。

「いたらどうしよう…？ ね、リサ子 先生だって彼女くらい、いるよねえ…」

「そんなの訊いてみなきゃわかんないでしょ。葵ちゃん訊いてみなよ」

「えーっ、でも“いる”って言ったらどうしよう」わなわな…俄かに不安になった。

「知りたいでしょ？」

「そりゃまあネ。でも、いきなりそんなこと先生に訊いたらバレバレじゃんよ」私にそんなこと訊けるわけがない。

「麻里に頼みなよ？」

リサ子はそう言った。

翌日はかねてからの計画通り、部活のみんなでテーマパークにくり出した。

このテーマパークは家から近くて（ラッキー）おまけに大好きな場所。

カップルもたくさんいてみんな幸せ一杯の表情。

タエコおぼさんの飲み屋のバイト代でお財布はほっかほっか かわいいおみやげいっぱい買っちゃおうと！ それとも少数豪華主義でキャラクターのでっかいぬいぐるみ買おうかな。

テーマパークのギフトショップはそれぞれに個性があって見てるだけでも楽しい。アトラクションも面白いけど趣向を凝らした可愛いお店を周るのもこのテーマパークの醍醐味といえよう。

祥子は彼氏と一緒に来た事あるけど「女同士で来た方がおもしろい」なんて言ってた。

「彼氏と一緒にだと全部向こう持ちでお土産も買ってもらえるからそれはいいかな」

麻里がちやっかりと言う。

私は早坂先生におみやげを買った。本條先生にもお土産を買ったのは私が早坂先生にご執心だということのカモフラージュのため。なので ここで値段にちよっぴり差がつくのはお許し願いたい。

いやはや お土産を選ぶ際の時間にも実は差があるのだよ。

先生お土産、気に入ってくれるかなあ。

次の日 早坂先生はお休みだった。

ずえっかくお土産もってきたのに。

早坂先生ったら再来週まで夏休みなんだそう ぐわわわん。

ま、いいか腐るもんじゃなし。

文化祭に出品する絵も仕上げられるかもしれない。私は立ち直りが早いのだ。

先生がいないと雑念がはいらずに制作に集中できるじゃないの。

私は何枚かキャンバスを用意して一つが乾く間にまた別のを手がけるといいうようにして精力的にこなしていった。

この頃私は“男は芸術の妨げになる”ことを発見した。絵のモチー
フを見てても先生がいるとどうしてもそっちに神経が飛んでしまい
作品に集中できない。私の芸術家魂がいつの間にか画用紙やキャン
バスから遠のいて早坂先生の姿を追ってしまうのだ。

だからどーよ。

私は早坂先生に逢いたくてたまらなかった。

できるなら下宿（実際にはマンションなんだけど、この古風な響き
が私の一途な恋にマッチしてるじゃないの）に訪ねて行って『先生
のお顔が見たくてつい、来てしまいました』なんて言ってみたいが
そんな事はしちゃいけない。アグレッシブなアプローチは私の
恋の美学に反するのだ。

しかし：

このままでいいのか葵！ という考えがないでもなかった。

のんびりした早坂先生とどうにかなるには待ってたってしょーがな
いんじゃない？とも思える。

つつーか先生が生徒に手エつけるってのは犯罪だから先生からムー
ブして来るってことはまず無いだろう。犯罪とまではいなくても
県令に定められてるとか市の条例によりとか 学校方針とか教師の
心得とか：なんかあんじゃないの？

しかも非常勤の先生の身でそんなこととして見つかったら正規採用ど
ころじゃなくなるよね。

あれっ、私、先生が私の事を好きって事 前提にしてモノ考えてな

い？

まあいい。

そうだ、暑中見舞いってのはどうよ。

さりげなくて懐古趣味だしこれなら私の美学に反しない。私は早速学校の事務室に寄って先生の住所を訊いた。私はついでに先生が結構この学校の区域に住んでるのも発見できて一石二鳥
私は心の中で“ヤツタネ”と小躍りした。

ところでこう次々と作品を描いていると絵の具も減る。

麻里は「今日は彼氏が仕事やすみだから」と言って学校までお迎えに来たおっさん彼氏のクラウンに乗ってさっさと帰ってしまった。
私は一人で学校の帰り画材屋さんへ行った。

私が画材屋さんの書棚の前でローランサンの画集をみると

「津田さん」

と呼ぶ声がした。

声の方を見ると早坂先生だった。先生は相変わらず皺くちなシャツに乾いた絵の具がこびり付いたジーンズ、それに涼しげな眼をしている。

なんという偶然、なんという幸運。

神様、仏様、天神様 アラーの神様 ありがとう！

私はその場にドロップして跪き、天を仰ぎたい気持ちになった。

いや、死んでもいい…。

早坂先生のお顔をお目めに焼き付けたまま天の国に行けるならこれ以上望むものはありません。

って…本当か？

たしかボン・ジョビのコンサートの時もそう言ったよーな。
そんなにしょっ中死んではこの身がもたない。

なのに早坂先生の不意の登場に私は心の準備ができていなかった
して、せっかく先生に自分の名前を呼ばれたのになんて返事をした
かは憶えていない。

たぶん、素っ頓狂な声をあげたかもしれない。

「聞こえなかった？ 向こうのパチンコ屋で遊んでて津田さんが画
材やの方に歩いてくのが見えたから呼んだんだけど…」早坂先生がそ
う言って私の前に立った。

エッ？

そんな…パチンコはどうしたの？

台の釘がガバ開きになってたらどーすんの¥¥¥¥？ジャック・ポッ
ト当ててたかもしれないじゃん。

勿体無い… ってそーゆー話じゃないんだよ。

「えっ 全然気が付きませんでした」

とクールを気取った。

先生、私を見つけてわざわざ追いかけて来てくれたの？

心の中でローランサンの画集 千切りまくって花吹雪にしてその下
で万歳三唱したかった。

「先生 夏休みなんでしょう？ パチンコなんて色気ないですね、
デートとかしないんですか」

うまいぞ葵！ よく言った。

「夏休み？ 学校の方はね でも研究所のバイトもあるからそんな
ヒマないなあ」

貧乏ヒマなしってか…。

つーか、ヒマないからデートしないってだけ？

じゃヒマあったらデートするんだ。　ツツコミたいのを押さえて…。

「先生もバイトしてるんですか？」

「津田さんみたいにヤバイバイトじゃないけどね」

先生はまだ微笑ってる。

私はチラッと先生を睨んだ

「でも　先生よか時給いいかもしれませんよ」

なんて可愛くないこと言うの。

「痛いコト言うね、いいんだよオレは好きな事やってるから金なんてそんなになかったって」

『エッ？』

そういう理論もこの世にはあるわけだ。

タエコおばさんや　お店に来るおじさん達の会話を聞いている限り

そんなこと言う大人は皆無に等しい。みんながお金を稼ぐためにあくせくしてる。

ツケを払わないお客さんに催促の電話を入れる時のタエコおばさんや　飲み屋の従業員達が（とは言っても板前さんと下働きのおばさん、それに雇いの女の人が一人）暇つぶしにポーカーで博打やるときなんか目の色がちがうもん。

場末のこんな飲み屋だけの話ではない。　TV　や新聞のニュースにはインサイダー取引や使い込み、汚職、賄賂。　果てはゆすり、たかり、恐喝、強盗　殺人などお金をめぐって人生狂わしちゃうコトが日常的に報道されてるじゃない？

だからキリストの神様は聖書の中でどのサブジェクトよりも頻繁にお金に纏わる講話をしておられるのよ！

うそだと思ったらお近くの書店で聖書をお買い求めになり読んでください。

必ずあなたの魂に…

って今伝道してどーすんの。

『好きなコトしてメシ食ってる』

だからこの世の穢れに染まらずに　この人はこんなにも澄んだ眼差しをしてるのだろうか：

この人の手から生まれる芸術はもしかして人知を遥かに超越して神の高みにまでリーチしてるのかもしれない。あの黒と赤の激しい色をした早坂先生の油彩画がふっと目に浮かんだ。

画材屋さんのレジで絵の具の代金を払い終わると先生が言った。

「部活の帰りでしょ　お腹すいてない？」

「ペコペコですよ」

店の出口まできたとき先生が明るい声で　「じゃあ何か食べに行こうか」

えっ：先生と？　二人で？

そんな願ったり叶ったりの事が今私の身の上に起こっていいわけ？

ラファエルの描く肉付きのいいエンジェルさんが私の頭上でコックリと頷いた。

時間はあるの？とか　どこがいい？とも訊かずに先生は商店街の道を歩き始めた。

この人って案外強引？

それとも無頓着？

もしかして自己中？

頭の中で先生のキャラを考察しながら付いて行った。

うちの学校の制服着た生徒もちらほらと商店街のアーケードにいる。

いいのかな、先生と二人でこんなして歩いてて：

ちよっと気になったけど　それより先生と時間が過ぎせるというコトの方がはるかに魅力だった。

ガラガラッという音を立てて格子戸を開けると

「らっしやい」

威勢のいい声が店の奥のカウンター越しに飛んできた。

続く

第三話

そうです。

先生は“商店街のラーメン屋さん”というきわめて庶民的な喰い物屋に私を連れてきたわけ。

そうか、私という人間は先生にとってラーメン屋に象徴されるような俗っぽく、卑近で安価、

つまり全然スペシャルじゃない存在なのね…。

この店の看板のサブタイトルにあるように“うまい、安い、スピーディ”

きっと私はこういうノリで誤魔化され先生の安直なおもちゃとしていいように遊ばれてしまうだろうか。

『バカにすんじゃねえ!』

この瞬間、「巨人の星」の星一徹のスピリットが私の脳にトランスしたのでろうか…。

私は脇のテーブルでジャンボ餃子をパクついてるニッカボッカを穿き、捻り鉢巻をしたヤンキーあがりの兄ちゃんの目の前の皿、ドンブリもろとも両手でひっくり返した。

「キヤー!」 「テメー いきなり何しやがんだよ! このアマ!」
ヤンキーの兄ちゃんが私の胸倉をつかみ 店内が騒然となった。

というのは真っ赤なフィクションです。

しかし…である。

私はラーメン屋さんというコトに又別の意味で拘った(しつけーな)何故ならラーメンという物は食するときにあの“ずずうーっ”とい

うえげつない音がするではないの。花も恥らう乙女が憧れの男性を前にそんなコトできるの？

百年の恋もいっぺんに醒めてしまうのではないの？

あのセンシユアルな早坂先生のお口がズルズルと麺を吸るところなんか見たくない。

ラーメンのお汁がところ構わずお口から飛び散るところなんか見たくない。

どうすればいいの？

先生にお顔隠してラーメン食べてもらえばそれで済むってもんじゃないの。

白いエプロンを着けたお姉さんが水の入ったコップと“お品書き”を盆に載せて持ってきた。

ここでせめて“メニュー”とお洒落な横文字で言えないのは辛いがそこは惚れた者の弱みと言うべきか先生と一緒になら学校の美術室であろうと画材屋だろうとはたまたラーメン屋だろうとそんな事はどーでもいいコトだった。

註※ これを読んだラーメン屋さんの中でお気を悪くされた方がいらっしやいましたらどうか誤解なさないで下さいネ。 作者はラーメンは大好きです。バッシングしているつもりは毛頭ございません

大切なのは今こうして大好きな人と一緒にいるということだった。

私と先生、そして二人が

囲むこのテーブルがまさしく愛の空間であった。

先生はドンブリから立ち上る湯気に目を細めながら

「この暑いのにラーメンっていうのはマズカッタかな、いやあ、汗かいちゃった」

（ラーメン屋さん またまた申し上げありません）

「いいですよ、先生 ここ冷房ガンガン効いてるし」

私はコップの水をガブリと飲んで氷を齧りながら

「先生のあの絵、準備室にあったやつ」

「うん？」

「あの絵のタイトル　なんていうんですか？」

「追憶」

「ツイオク？」

「うん、追いかけるの“追”に…」先生が漢字の説明を始めた。

「わかりますよ」

偏差値低い高校だからって舐めんなよ。私は憮然として言った。

“追憶”って過去のコトを思い出すことでしょうか？　じゃ先生は

あの作品の中に自分の思い出や過去の出来事を描いているんですか」

「オレ個人のっていうより　人類全体のって感じかな」

先生は大きな餃子を一口で飲み込んでから

「あの絵にひつじが描いてあるの…憶えてるかな？」

「ああ、はい。　やっぱりひつじだったんですね」

「やぎかと思った？」

「どっちかなあゝって」

笑ってごまかすと

「アブストラクトだからいいんだよ。気にしなくて」

と言って先生はにっこりした。優しい笑顔。割り箸を持つ先生の骨

っぽい白い手に私の視線が移った。短い爪先が清潔だった。

この手で触れられてみたい…

「津田さんの絵は？　進んでるの？」

先生が澄んだ瞳を向けた。

「あ、はい、はかどってますよ　面白いくらいに」

「オレがいけない方が制作意欲湧くのかなあ　困ったな」

先生はちよつと眉をしかめた。こんな表情がちよつとカワイイ。

「そんなコトないですよ　ヘンなこと言わないで下さい」私はム

キになった。

先生がいなくなったら困る。　どうしていいかわかんなくなる。

鈍いんだ　この人…　っていうより　サイン出してないよね　私。

だけど　なんて言えばいいの？

“好きです”なんて絶対言えないし、それ以前にそんなコト知れたくない：

知られたら もう普通に会ったり 話したりできなくなりそうで…。
「こないだ描いていたツリーハウスの仕上がったの？ あれ面白い構図だね 男の子と女の子がツリーハウスに登ろうとしてて…」
早坂先生は私の絵を覚えててくれてる。私の胸がドキンと弾んだ。

「今 それの四作目です」

「えっ 何でそんなに描くの？ 最初に描いたやつ 気に入らなかつたの？」

「あれはね、シリーズ物で全部で7つあるんですよ」

「凄いいね 7つ？」

7という数字はキリスト教で完全を意味するの。

「そう、あの男の子と女の子はアダムとイブの象徴でツリーハウスはエデンの園だから

もちろん7作目では二人は神様に背いた罪としてツリーハウスから追い出されてしまうのよ」

私は目を伏せた。

何か自分がとても意地悪な意図をもってこの作品に取り組んでるような気がした。

ラーメン屋さんを出ると外は雨が激しく地面を叩いていて さっきまでのカンカン照りがうそのようだった。

ラーメン屋のおばさんが私達にビニールの傘を貸してくれた。

それも1本だけ。 商店街のアーケードを出たら先生と私は相合傘で歩ける。

こんなにも都合よく雨が降ってくれるなんて 私には幸運の女神様がついてるのだ。ポツチェルリの「ヴィーナス誕生」の裸のヴィーナスが私の肩に手をかけている、ってあれは“美の女神”だね。

いや“幸運”も兼業してる筈だ。

ありがたいこと！

傘の要らない商店街のアーケードを出ると早坂先生は「じゃ、濡れ

ないようにネ」といって傘を開いて私に手渡した。

「先生は？」

「オレはパチンコ屋の駐車場に車停めてあるから」

早坂先生がジーンズのポケットに両手をつっ込んで言った。

「なくんだ、先生と一緒に傘させるなって思ったのに」表面冗談を装い上目遣いで甘えたように言ってみた。いくら私でもこのくらいなら飲み屋で修行してりゃ朝飯前だった。

先生がちよっと驚いたように私の目を見た…。

『本気で言っているの？』その目が言っているようだったのは私の思い違いではなかったと思う。

一瞬、先生の視線と私の視線が絡み合った。

私は戸惑って目をそらした。

「じゃ、さようなら ごちそうさまでした」

雨の雫に覆われたビニール傘をさし、そのの下で軽く頭を下げると私は駅にむかって歩き出した。

ヴィーナスのバカちゃん相合傘はどうなったんだよ！

胸の中で悪態をついた。

尤も先生とたまたま街中で遭遇しお昼まで一緒に食べてこれ以上望むのは贅沢というより度が過ぎるのか。だって先生はパチンコを放り出して私を追ってきてくれたのよ。

そうだ。

なんでそこに焦点をあてて物を考えないの。

もしかしたら先生だって私の事、憎からず思ってるんじゃないの？

嗚呼 そうであって欲しい。

そしてあわよくば “ちよっと気になる存在” として先生の心の隅に棲まわせてもらいたい。

もっと言うなら先生の心を掻き乱し、狂おしいほどに悩ませてみたい。

さらに言わせてもらえば寝苦しい夏の夜、寝返りを打つのももどかしくHな一人遊びのおかずにしてもらいたい……。

何を言ってるの！不謹慎な！

先生は私の中で限りなく清い存在であり、あくまでも聖職者として世俗の穢れに染まらずに崇高な芸術の高みに向かって歩む者として祭壇に捧げねばならないのだ。

早坂先生は生贄か。

いえ そういう意味ではなく、とにかく『一緒にドライブしてファミレスでご飯食べて、その後何にもすることないからラブホテルにしけ込んだ』みたいなレベルであってはいかんです。（ゴメン麻里）

先生と私はゴッホの描く向日葵畑でアンダルシアの陽を浴び、無邪気に それも鼻垂らし小僧的な無邪気さではなく“ロード・オブ・ザ・リングス”に出てくる小人達のようなアイルランドのセルティックな響きにのせて踊るような穢れのなさ、あ、あれはシャイアーという架空の村だったか……。

全部が地理的に滅茶苦茶！

とにかくここで重要なのは同じ小人であっても白雪姫に出てくる7人の小人であってはなんのです。ドゥーピーやグランピーに登場されては“ハイホー♪ ハイホー”の世界になってしまうじゃないか、でしょ？

あれっ、そういう話だったけ？

ちがう何が言いたかったかって言うと“無邪気さ”というコンセプトについてでしょ？

するとここにかかなりの無理があるように見える。

そもそも男性というのは“やるか、やらないか”の物差しでしか対象（女性）を見ないのではないの？（飲み屋のバイトは確実に私の男性観を蝕んでいた）

生物学的に考えても月に一度しか生殖のチャンスが与えられていない可哀相な女性に比べて、いつでも何処でもOKな男性にとってはBGMがセルティックだとか戯れる場所がシャイアーだとか、そん

なコトはどうだっていいんだよね。

要は“やれれば”いいんじゃない？

ユダヤ教とキリスト教の神様であり、全知全能の方がお創りになった男性とは何故にそのような情け無い精神構造を持つてるの？

“神は人をご自身のかたちに似せられてお創りになった”と聖書にあるでしょ？

つまりは神様の模造品、似て非なるもの。

神様は人類最初の人、アダムを創られてから

“ちよつと不味いなコレ、そうだ、もっといいものを創ろう！”
“と思つて人類最初の女性、イブを創られた。”

うそです。聖書にそんな事 書いてません！

“この書（聖書）の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれ（聖書）に書き加えるものがあれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる”

一黙示録 22章18節

黙示録、こわい！

ごめんなさい、神様っ。

日曜学校に通う小学生程度の聖書知識しか持っていなかった私は神様がそのように男性を創った意図など理解できず、またそれ以上掘り下げて考えるという事もせず遂に深遠な神の御心など知らぬままこれ以上堕ちられないという所まで恋に陥ちていった。

それから数日の間 私はラーメン屋の出来事を頭の中で幾度も反芻しながら とめどもなく甘い想いに浸った。早坂先生のシャツの襟の隙間から覗く成熟した男を感じさせる胸のヘアーなどを思い出しながら、ともすれば陶醉し、眩暈を感じ、貧血を起こして吐き気を催すほどだった。

嘔吐しそうな程気分が悪くなっても私は先生のイマージュを追い続ける事を止めなかった。

第四話

ぶっ倒れそうな体にムチうちながら想像の嗅覚で先生のパフュームを嗅ぎ、肺呼吸が困難になり、朦朧とする意識の中で、瞼に浮かぶ先生の艶かしい手にもんどりを打つてのた打ち回り、やっとの思いで家の柱に縋りついた私はロダンの彫刻、カレーの市民さながらにボロボロだった。

それじゃただの変態じゃん。

私は自分の背負う恋の重みに私は耐え切れなくなって聖書をひも解いた。

“すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう”

—マタイによる福音書11章29節—

お願いしますキリスト様、私を修道院に入れてくださいな。私はニサン「サントス・アズール」になり、マザー・テレサの子分になってインドの貧しい人達のために一生この身をささげますからこの煩惱を取り去って下さい。

所持品がたとえサリー一枚とそれを洗うためのバケツひとつになっても この恋に想い病む魂と引き換えにして下さるならそれ以上望むものはありません。

などと迂闊にお祈りをしてはいけません。

得てして神様はこういうお祈りは叶えて下さるお方。

安易な考えでお縋りしてはいけません。

でないとホントに修道女になっちゃうぞ。

そうではないのだ。

私が本当に欲しいのは一人の女として恋に身を焦がし、芸術に身を捧げ、世俗の中にあっても清らかに、あたかもドロ沼に咲く白い水

蓮の花のような生き方だった。

美しい……。

私はなんという麗しい精神をもった少女だったのでしょうか！

などと、このように無為に数日を過ごしてしまった所為か、私は先生に暑中見舞いを書き送ることなどすっかり忘れてしまった。

母が婦人会のおばさま連中と盆踊りのお稽古にいそいそと出かける頃になって

私は夏祭りが近い事を知った。

去年まで着ていた浴衣の柄が子供っぽいというので、その年は母が浴衣を新調してくれていた。

「お母さん、新しい浴衣見せてよ」

それまでほとんど浴衣などに関心のない私が見たいと言ったのだ。

母は驚きながらも嬉しそうに、イソイソと和ダンスの広い引き出しから畳紙たたしに包まれた浴衣を出した。

「どう なかなかいいでしょう？」

母が畳紙を開けると黒地に赤紫の大輪の牡丹というド派手な柄が現われた。

派手なだけじゃなくてなんていうのか玄人サンが着そうな柄。

帯はと云えばこれまたテカテカと光る水色の代物。

今でこそ黒地の浴衣なんて珍しくはないけど、私が高校生の頃は浴衣の地色といえは 濃紺や白が主流でたまに緑や赤なんかもあったかな。

まちがっても黒地の浴衣を着る高校生なんていなかった。

「ちよつとハデだけど いいのよ、若い子はこのくらいで、ねっ」

“もしかしてこれ、タエコお婆さんの見立てじゃないの？”

と疑いたくなるような演歌歌手にでも着せたいような浴衣だった。

私はこの浴衣を着て夏祭りに行く自分の姿を想像した。

年齢相応の浴衣を着た可憐な友達の中で一人浮いちゃうのが私。

とは言え、ウキウキしてる母に“そんなの着たくない”とは言えな

い。

私は母にとっても優しいのだ。

私の両親は昔の人にしては晩婚で母が私を生んだのは30代の終わりだったから

経済的、精神的にはともかく肉体的には結構しんどかったのではないか。

その様な背景があるのを知っていて 私は自分の母親にむかって“クソババア”なんて言う同世代の人達の気が知れなかった。

『親とは敬愛し、いたわるもの』

それはいいとして。

私はこれを着て早坂先生とお寺の境内を歩く姿を想像した。

清潔、清廉そのものの先生とオミズの姐さんみたいな私が目に浮かんだ。

イケテナイ……。

誰の目から見てもナイーブな青年を唆してる女がヒモの目を盗んで逢っている様に映るのではないの。

『おかーさん、なんでこんな柄選んだの？』と詰め寄りたい気持ちをぐっと抑え、

「うん、個性的でいいんじゃないの」と私は感想を述べた。

「そうよ、葵チャンは芸術家サンだもん、みんなと同じなんてつまらないわよね」

なるほどね、お母さんが選んだんだ。案外ラディカルだね。

もしかして私の方がずっと保守的なんじゃないか。年寄りを侮ってはいけません。

さて、夏祭りは小学校時代の同級生の一人が会場となるお寺の御曹司ということで気の合った同窓生で集まる事になった。

その中に一人、おばあさんが日本舞踊の師匠をしている奈津美ちゃんがいいた。

彼女は中学を卒業すると進学せず暴走族の彼氏と同棲しているとい

う噂だった。

いわゆるヤンキーってやつ。

「みんな、元気ィ？」

彼女が髪を金髪に染め、歌舞伎紫の浴衣にゴールドの帯を締めて挨拶したときはみんな少なからずギョツとしたのではないか。

少なくとも私は驚いた。

金とか銀の帯ってあの留袖とかに合わせるんじゃないの？

しかもその金髪を新橋辺りの芸者さんが結ってるように仕上げてたから、最初何処の誰さんかと思ってしまった。

ただ内心、この人とツルんでれば私は浮かない、と安心したのは事実である。

境内は安っぽく、毒々しいハロゲンライトに照らされていつもの静粛さとは打って変わった風情だった（と言ってもお寺なんて普段滅多に来たことないからよくわからないけど）

奈津美ちゃんが「葵ちゃんの浴衣、イカしてんじゃん、何処で買ったの？」と言いながら無遠慮に私の袂を広げた。

「お母さんの見立てだから知らないけど」

私はちよつと照れて言った。

「葵ちゃんのお母さん、センスいいじゃん！　うちのババアなんかには絶対選ばせらんないよ」

この人は例の『お母さんを敬わず“クソババア”って云っちゃう人種』なんですね。思わず説教したくなっただけど、どーせ聞かないだろう。

奈津美ちゃんは私の浴衣が気に入ったせいで、私を自分と同類かそれに近い人種だと誤解したのか、妙に懐いてきた。

それはいいんだけどね。

津美ちゃんがテキヤのアンちゃん達を相手に「ハル、これもつと安くしなよ」とか「アキラ、シヨージがこないだ貸した金早く返せってさ」

などと大声話してるので私はなんとも意心地が悪い。

もっと言えばちよつと恥ずかしくなった。

さらに言うならコワイ。

だってテキヤのあんちゃんって言わばヤクザだよね。

みんな体にインク入れてんじゃないの、それも龍とか般若とかイカツイやつ。

おまけに私をチラツと見ながら奈津美ちゃんに「おめえのダチよお、結構マブイじゃん」とか耳打ちしてる。

中には「後で紹介しろよ」とか、何処の店出てんだよ」とか言う奴まで。

オイオイ、私ってそんなにオミズっぽいわけ？

ま、一応バイト的には。

それでも自分では深くハマってるつもりないし、私にも選ぶ権利はあるのよ。

それもこれもこの浴衣のせいだ。私は産まれて初めて母が恨めしくなった。

「ねえ、奈津美ちゃん あんず飴買いに行こうよ」

私はその場から一時も早く逃れたくてそう言った。

「ああ、ゴメン、ショージに組のものの様子を見とけてって言われてるからさ」

ショージとは多分彼氏さんのことなんだろう。

族からヤクザに昇格したのか。

おお、コワッ。

でも奈津美ちゃんは見かけによらず親切だった。

幼馴染のよしみだよ」と言って何処の屋台でも私にお金を払わそうとしないし

(と言っても 小学校時代 特別仲がよかったというわけでもない)
「あいつら(テキヤのアンちゃんたち)のコト気にしないで、ヘンなコトしたらあたしに言いなよ、絞めてやつからさ」と腕っ節を見せて笑った。

高校に進学せず、中卒で大人の世界にいきなりデビューした奈津美

ちゃんは案外大人で優しさと強さを持ち合わせてるのかもしれない。
今思えば 複雑な家庭で育った奈津美ちゃんは早く大人になるより他にサバイバルの道がなかったのかも。

「葵ちゃん、射的やろうよ。あたしベガスで本物のやったことあの、凄いでしょ」

えっ？ベガスってあのアメリカのラスベガスのコト？本物の銃撃つたことあるんだ……。

コツエェー！

「タカシイ、早く行かないと土井君待ってるわよお」私の隣りで奈津美ちゃんが射的の屋台のおじさんに紙幣を渡してると、ちよつとハスキーな女の人の声がした。

何の気なしにそのハスキー声の方を見て私は言葉を失った。

続く

第四話（後書き）

第五話

早坂先生がおんなの人と一緒にいる。しかも、おんなの人は先生のファースト・ネームを呼び捨てにしている。

先生の彼女さん？

私の怖れていた事が、こんなにも突然訪れるなんて。

しかも、お祭りという本来ならおめでたい筈のイベントで。（って何の神様かもわかんないんだ、別にめでたいこともなからう）

なんてこと！酷い、酷すぎる。

どうして？ 私がどんな悪さをしたと言うの？ どこが至らなかったというの？

私のどこがいけなかったの？

教えて、お小遣いが足りないの？ ベッド・マナーが悪かったの？

お酒を飲みすぎたから？ お願い、先生、行かないで！ 何でもするわ、貴方の望むものは何でもあげる！

だから行かないで！！

……ってドラマ・クイーンになってる場合じゃないっしょ。

顔からすうーっと血の気が引いていくのを感じながら 私はその場に留まるべきか、それとも逃げるべきか逡巡した。

境内は大勢の人々でごった返していた。

あまつさえ奈津美ちゃんと歩いてて、通り行く人々が振り返るのにもし私がその場から去るとすれば、かなりの人込みを押し分けて行かなくてはならない。

そうなると私達の姿が先生の目に留まる事は明らかだった。まだ気づいていない。私は咄嗟に先生達から背を向けた。

パン パン パン パン

「葵ちゃん、観てみて！ 真ん中当たった！」

射的の模造銃を抱えて奈津美ちゃんが小躍りして叫び、周りの見物人が感嘆の声を上げた。

なんでこういう時に目立つコトするんだよ！

「津田さんじゃないか、来てたの？」

「えっ」 振り向くと早坂先生だった。その横にハスキー声のおんなの人が寄り添うように立っている。

「いやあ、見違いちゃったな」

「……。」

「どこのおねえさんかと思ったよ」

分かってるわよ。 その“おねえさん”は“お姉さん”じゃなくて“御姐さん”の方でしょ。

「こんばんは。 先生もいらしてたんだ」 今やっと気づいたというフリをした。

先生は淡いグレー地に細かい黒い格子縞の浴衣、渋い黒っぽい帯を締めていた。端正で上背のある先生は大正時代の書生さんみたいに爽やかだった。

「隆だあれ、この人？」 連れのおんなの人が胡散臭そうに私を見て言った。

「津田葵さん… 高校の美術部の生徒だよ」

先生、私のファースト・ネーム覚えててくれた。

「こんばんは」

私はペコリとお辞儀した。

「こちらは研究所で一緒の宮崎さん。これから同僚の家に焼肉食いに行く所だったんだんだけど、お囃子が聞こえてさ、つい寄り道しちゃったんだ」

「お祭り、好きなんですネ」 もっと気の利いたこと言えっつーの。

「夏の風物詩だろ、一応。 盆踊りもあるんだね、津田さんは踊らないの？」

早坂先生がその澄んだ瞳を私に向けてきいた。

「からかわないでくださいよ、盆踊りなんて婦人会のおばさんか飲み屋の女将さん達が仕切って、あとは年寄りと子供がやるものですよ」

なんと可愛げのないことを……。

「あら、素敵な浴衣着てらっしゃるから櫓にお上がりになるのかと思っただわ、観れなくて残念」

宮崎というおんなの人が皮肉たっぷりに言った。

畜生！ こちとら芸者とちがうわい。

「葵ちゃん、なんだあ、知り合い？」

おおっ、奈津美ちゃん射的はどうしたの。もう止めちゃうの？

宮崎さんの視線が奈津美ちゃんに釘付けになった。

「う、うん。学校の先生とそのお友達」

なにか嫌な予感がする。

「奈津美です。へえ、イカス先生いるんじゃない、葵ちゃんの学校」
奈津美ちゃんは私の背中をバンと叩き物怖じもせずに言う。

「男の人の浴衣姿って色気あるよね、うちのシヨージなんか夏はジヤージ、冬は半纏だもんね、参っちゃうよ、どーにかしろって感じ。だけど今日のお祭りのテキヤは殆どあいつの組のもんだからね。まあ、親分に顔は利くし、甲斐性はあるのよ、あれでも。あ、ねえねえ、そういえばこのお寺もうちらの同級生のお寺さんじゃないってあんた何が言いたいのか？」

「今日のお祭り結構浴衣着てる人多いけど、あたしと葵ちゃんが断然垢抜けてるよねえ、ほら、みんな振り返って見てたじゃん。柄にしろコーディネートにしろあたし達は格が上っつかさ、衣紋の抜き方からして違うじゃん」

奈津美ちゃんが“見返り美人”のポーズをとった。

自画自賛って言うのか、空気が読めてないって言うのか、私はもうどーにでもなれっという心境だった。

「奈津美さんも津田さんも綺麗だよ。ほんと最初見たとき誰かと思っちゃった。いつも制服着てるとこしか見たことないし、髪も下ろしてるでしょ？ 今日みたいに結ってると大人っぽく見えるね」

綺麗？ 大人っぽい？ 今、先生そう言ったよね。

お世辞でもうれしいよ。

「隆、もう行かないと遅れちゃう」宮崎さんがしびれを切らして先生を急ぎ立てた。

行ってしまうの？

せっかく逢えたのに。

私は宮崎さんと先生の後姿を見送りながら切なくなった。

私はこの時ほど自分の置かれている立場がもどかしいと思ったことはなかった。だってそうでしょう？

もし私が高校生じゃなくて先生の生徒でもなくて、ふつーの大人だったらこんな風に気持ちを隠してただ先生を見つめてるだけなんてことはなくて、きっと宮崎さんみたいに堂々と「デートしてます」って大手を振って世間に顔向けできるんだよ。

二人で何処に行こうと何をしようと誰のお咎めも受けずに交際えるんだよ。

どうしてもっと早く生まれて来なかったんだろう。

どうしてもっと違う形で巡り逢えなかったんだろう。

と嘆いてみても所詮は負け犬の戯言、誰が本気にするでしょう。

いいえ、いつそ犬だったらよかった。犬であればあの二人に吠え付き、噛み付いてこの鬱憤を晴らすことも出来たかもしれない。

（そんなコトをすれば保健所に直行だよ。ワンワン）

犬にもなれず恋人にもなれない私は一体何処へ行けばよいの？

やはり行き着くところは修道院なのかしら。

17歳の誕生日を目前にして私の青春は丘の上の高い鉄門の後ろに閉ざされてしまった。いや、むしろこのお寺さんのお墓に葬られてしまったと言っても過言ではないでしょう。

皮肉な事よのう。

その晩私はリサ子にお祭りの一部始終を話した

リサ子は

「やっぱり（彼女）いたんだあ、でも分かってよかったよ。これで葵ちゃん

スツキリするよね。 葵ちゃんは可愛いしさ、モテルからまたいい人でてくるよ」

可愛くてモテるんだったらどーしてこう、うまくいかないの？ 恋をする対象にはケミストリーが無ければいかんのだよ。

仮にブラピがイイ男でも、反応するモノがなくて燃烧できるものになかったらブラピも志村ケンも一緒なの

翌日 傷心の私にリサ子はパフェを奢ってくれ、 とてつもなく背の高いガラス容器にはいったパフェを食べながら来週から早坂先生が学校に戻ってくる事を思い出した。

「叶わぬ恋というものがあってもいいんじゃない」と呟くと

「まあ葵ちゃんがそれでいいのなら 諦めろとは言わないけどさ、やっぱり自分が好きな人にはこっちも好きでいてもらいたいよ」もちろんそうなんだけど。

家に帰ると描きかけのキャンバスの前に腰を下ろし、重い筆を手にとった。

せめて先生の“よき生徒”でいようと思った。

この恋が叶わぬとも絵を描くという情熱が残されてるじゃないの 凹んでどうする、葵！

けれどキャンバスの絵が涙で霞んでいくのを私はどうすることもできなかった。

頬を伝わる涙を拭うこともせず キャンバスに絵の具を重ねていった。

その時の私の想いをぶつける場所はキャンバス以外になく、シリーズで描いているこの4枚目の絵は暗い雰囲気が滲み出ている物で、私のその時の気持ちそのままを映し出した。

私が文化祭に向けて制作していたのは前にも書いたように7枚の絵からなる物語風のシリーズ物だった。

最初一枚は白髪のおじいさんが木の上に小さな可愛らしいお家を作り、二枚目で一人の男の子と一人の女の子がそこで楽しく遊んで

いる。

それらは明るい色調で平和な様子を表現した。

三枚目は女の子がヘビともサンショウウオともつかない動物とお話してるところ。

四枚目もやはり女の子が画面に描かれ、彼女がりんごを食べているところ。

私はその時 五枚目の絵に取り掛かっていた。大まかなアウトラインとディテールはコンテを使って描き、フィキサチフをかけて乾くのを待っていた。

美術部の部員の殆どは自分の作品を手がけながら文化祭のポスターのデザインについてあーだ、こーだと話し合っていた。

“文化祭は十一月なのだからそんなに急がなくてもいいじゃん”というのが大半の部員の意見で そういうお気楽な雰囲気をぶち壊すのは本條先生だけだった。

「君達 後で徹夜で仕事したくなかったら今から始めなさい。まだデザインも決まってないんじゃない。十一月なんてばやばやしてると思うだよ」

「そうなんですけど、先生 意見がまとまらないんですよ」カンちゃんが両手を頭の後ろに組み、椅子の背に反り返って応えた。

「それをまとめるのが 部長の役目でしょ」 本條先生がカンちゃんのを頭をコツンと軽く叩いた。

「痛っ」

「君達 ホントのんきだね、僕が学生だった頃はアトリエや工房に入ったら、もっと集中して取り組んだけどね。展示会の前なんかはそれこそ寝食忘れて制作したもんだよ、ねえ、早坂先生？」 本條先生が腕を組み仁王立ちになって、早坂先生に視線を移した。

「そうですか？教員試験の期間は大変でしたけど、あとは オレ結構バイトや飲み会やって遊んでましたよ」 早坂先生、正直すぎるぞ。

「ああ、そうなの？ T大は結構のんびりしてたんだ。 僕なんか

ねえ、一旦自分の作品に取り掛かるでしょう？　そうすると何かに憑かれたように、っていうか　忘れちゃうんだよね、周りの事なんて。　のめり込むっていうのかなあ、世界に入っちゃうんだよね、その作品で表現したいことや、観る人に訴えたい事なんかさ」

流石、新進芸術家として知られる本條先生です。

「人の魂を揺さぶるような作品創りたいと思ったら、そのくらいの気迫は必要でしょ？　まあ、お嬢さん方のお遊びや暇つぶしならそれでもいいんだけどね」

ひえええええ。

真摯に芸術に身を捧げられてる本條先生のお言葉であるだけに　それは私達にとっては、痛いセリフでした。

第六話

翌日から私達部員は本條先生のお言葉に刺激されたせいもあって、「喝を入れよう!」ということになり 今までより真剣にポスターに取り組んだ。

デザインは皆の考えた物から少しずつい所を採用し、文化祭のタイトルが「松竹祭」と、とんでもなく日本酒を思わせるような名前で、こんなのがまあよく生徒会通ったなというくらい偏差値低い学校丸出しなので、あまり気取ったのは不釣合いなんじゃないかという結論に達した。

さて シルクスクリーンと言うこの印刷方法はかなり原始的で、今のように印刷技術が発達している時代から見れば笑っちゃうような、高度の技術はほとんどといって要らないものでした。

にも拘らずカッターナイフで切り絵などしたこともない不器用な私達には結構 苦労が多かった。

ある日、スクリーンに貼り付ける和紙をカッターナイフで切っていた私はついでに親指から掌も切ってしまうという失態を犯した。

「痛ゝあゝ」私は鋭い痛みに堪えかねてその場に屈みこんだ。

「葵ちゃん 大丈夫?」麻里が真っ先に駆けつけて私の手を見た。

「早坂せんせゝい、津田さんが手エ切っちゃった!」

「大丈夫? どれ見せて」早坂先生が私の傍に来た。

せっかく切り抜いた和紙に血がつかないよう、作業台から離れるとポタポタと赤い血が床に垂れた。

先生は私を保健室へ行くように促した。

「気をつけないきゃダメじゃないか。 津田さんって案外そそっかしいところあるなあ」

階段を降り2階の保健室へ向かう途中、早坂先生が言った。

「友達にもよく言われます痛みを堪えて言った。」

「校則破って堂々と、店の名入りのエプロン着てスーパー行ったり

ね」

おかしそうにチラッと私の顔を見た。

「もう言わないで下さいよ」

「それからラーメン屋に画材 置き忘れたでしょ？」

あれは先生にお昼をごちそうになって舞い上がったたからかな。

私の制服を見て憶えていたラーメン屋のおばさんが学校に連絡してくれたんだよね。

「あれっ、扉の鍵閉まってるよ。 ちょっと事務室行って鍵もらってくるから」

先生が下の事務室に駆けっていくと私は一人保健室の前に残された。

鍵がかかっているということは誰もいないってことじゃんね。

普段は運動部の誰かが部活の最中に怪我をしたりするので保健室は開いていた。

それが今日に限って！

つまりなにかい？ 保健の先生も留守ってこと？

おおおうっ、これぞ神様の与えたもうたチャンスじゃないの？

私は手の痛みも忘れるほど狂喜した。

拍手して喜びたいところだったけど血ノリのついた手では気持ち悪いので我慢した。

先生が事務室からもどり保健室の鍵を開けている間、私の胸はもうこれ以上早く鼓動しないだろうと思うほど高鳴った。

バックン バックン バックン バクバクバクバク……。

切り傷の出血と相まり、貧血と高血圧が一気に攻め寄せ、私は失神しそうだった

しかしここで失神してはならないのである そんなことしたらこれから起こるであろう先生と二人っきりの時間がふいになってしまわないの。

だめよ、しっかりするのよ！ 葵、これは神様が下さったチャンスなのよ。

ここでぶっ倒れてどうする！ もったいないぞ。 気を確かに持つ

のじゃ！

と思いながらも私の意識は次第に朦朧となり、頭が空っぽになっていくような感覚が押し寄せ（それはこの時だけに限らないかも）ああ…もうダメだ。遂に全身の感覚が麻痺し、私はまさしくその場に……。

へたり込んだだけで済んだ。

「大丈夫か？ しっかりしろ」

早坂先生は慌てて私のか細い肩を抱き（ウフツ）無理やり保健室のベッドまで歩かせた。

その時の私の肩に置かれた先生の確かな手の感触も 先生の体から立ち昇る微かな香りも私は一生忘れないと思った。

この後どんなハイ・センスなデザイナーがプロデュースしたパフュームもこれ程までに私を恍惚とさせてはくれないだろう。

先生は私を保健室のベッドに腰をおろさせ、血に染まった私の左手を手を取った。

「結構深い傷だね、痛い？」

私の顔をのぞき込んだ。

私はコクンと肯き先生の目を見た。

「洗わなくちゃね、立てる？」 と言いながらまた私の肩を支え保健室の窓際にある洗面台まで連れてった。

蛇口の水は思ったより沁みて、流された血が細い筋となりながら渦を巻いて白いシンクの中心に飲み込まれていくのを私は見つめながら「今この人はこんなにも私の近くにいます」

それだけで私は幸せだった。 先生は優しくてこんなに一生懸命私を気遣ってくれるのなら指の一本もげたってどっていうことはないと思った。（ウソ ウソ！）

保健室の白く塗られた壁と カーテンの隙間から射す夏の陽の光以外 何の色彩もないこの空間で赤い血の色は僅かでも美しく鮮やかだった。

「この間のお祭りでお会いした宮崎さんってきれいな人ですね」 早

坂先生が馴れない手つきで私の手に包帯を巻く間、さり気なく言うてみた。

「そうかな、うん まあ 綺麗なほうかもしれないけど……」
「しれないけど……なんなの？ すきななの？ きらいなの？」

「先生 好きなんですか？」 ズバリ訊いてみた。

「嫌いじゃないよ」

先生は包帯を巻き戻し、もうちょっとキレイに捲けないかなと苦労してる。

「じゃあ 好きなんだ」

やや突っぱなした様に言うと 先生が包帯を持つ手を止め 何かを訴えようとするように私の目をまっすぐに見た。

「……………」

早坂先生がふっと溜め息をもらした。

「どうしてこうなっちゃうんだろう 津田さん。 オレさ、いい教師になりたかったけど君を見てると自信なくなっちゃって、ヘンなんだよな」

何？ 何が言いたいの、先生。

私、先生の自信失わせるようなこと言った？

「そんなことないですよ、先生はいい先生ですよ。今だってこうやって私の傷の手当てしてくれてるじゃないですか。包帯の巻き方、上手いですよ。 保健の先生だってこんなに上手くは捲けませんよ」美術教師に包帯の巻き方褒めてどーすんだ！という気持ちはあったけど、二十三歳という先生の年齢はもしかして私が考える程大人ではなく、アイディンティティーの確立がまだ不安定で自信喪失、自己不信なんかに悩むのね。などと思い 先生が一層いとおしく感じられて大胆にも先生の顔を見つめてしまった。

「そういう意味じゃなくてさ、なんて言っただいかな」先生の顔が少し曇った。

先生は包帯を巻き終わるとそれ以上は何も言わず立ち上がった。

「さ、行くぞ」保健室のドアの方に歩いていった。

私はこれでまた麻里に借りができたと思いながらも“持つべきものはよき友じゃ”と心の中で微笑んだ。

宮崎さんは早坂先生の彼女じゃないとわかって私は喜んだ。

女にとって他の女性の影を意識しながら暮らすほど嫌なものはない。

私には二号サンになる人の気持ちも、あるいは妻をもっている男性の愛人（やっぱり二号サンか、いや二号サンというのは経済的援助という恩恵を受けているのだからまだいい、愛人ならヤツテ終わりではないの）になる人の心理がわからなかった。

一般の社会通念、道徳からすれば先生と生徒の恋愛はやはりマズイのかもしれないが（はつきり言ってマズイ）結婚という法の基にくつついてる男女の關係に割り込んで他人様の家庭を破壊しかねない不倫などよりは背徳性から言ったらかなり低いのではないの？

否。むしろ独身の先生、生徒に“学校”という環境をあたかも聖域でもないのに聖域扱いにして恋愛關係を否定する方がよほど不条理なのではないの？ と自分勝手に解釈して私は少しも悪びれなかった。

もちろん片思いであり、ひっそりと私の心の世界で浸っているだけの恋だったから罪悪感などある筈もない。

私は保健室で早坂先生に捲いてもらった包帯を私は家宝として大切に保管した。

遠い将来 孫ができた時 “この包帯はのう、昔ばあちゃんが好きだった人に巻いてもらったんじゃない”と話す自分の姿を想像して“あー、やっぱり年とりたくない”と思った。と思っても哀しいかな人は歳を取ってしまうのです

夏休みが終わろうとする頃 私はに17歳（セブンティーンだぞ！）になった

二学期になると私は学校の授業、部活、バイトと3足のわらじを履き忙しい日々を送っていた。

バイトと言っても学校が始まってからは タエコおばさんが氣を利かして金曜日と土曜日だけにしてくれていた。

ある土曜日の晩 バイトのパシリでスーパーへ行くと、また早坂先生に逢った。

「先生、今晩は。お買い物？」

もう先生に見つかってヤバイという気持ちはなかったから気軽に声を掛けた。

「うん、津田さんはバイト？学校と部活もあるし大変だろ？」

「でも週2だからラクですよ。それに結構面白いし」

「ふう〜ん、 店の仕事好きなんだ、酔っ払うお客さんもいるから大変かなと思ってたけど」

先生、心配してくれてたの？

「タエコおばさんがいるから平気、それに私こう見えても結構客あしらい上手いんです。でもね、先生、こんなバイトしてると悪い子だって思う人はいるの」

ちよっとシュンとしたふりをして言ってみたが 実際のところ辞めようと思うほど私はナイーブではなかった。 だってこのバイト、おいしいもん。

「オレはそんな風には思わないけど…」先生が少し厳しい表情をして言った。

「ね、これからちよっとオレに付き合わない？」 何かを決心したように先生が言った。

はあ？ あの、私 今 バイト中なんだよ、先生。

でも、でも……。

先生とこれから何処かへ行くの？ ねえ、そうだよ？ オレに付き合えってそういう事でしょ？

でも、お店どーすんの？ 考えろ、葵！ あんたパシリでここ来て

んのよ！

このままバックレたらちよつとまずいんじゃない？　　って思いつきりマズイよ。

「いいけど、タエコおばさんに言わなきゃ」

何を言い出すの、葵。　あんた頭おかしくなった？

「電話すればいいよ」

先生は財布の中からテレカを出して私に差し出した。

「車　こっちに停めてあるからさ」先生はレジでビールとカップ麺のお金を払うと

スーパーマーケットの出口に向かって歩き出した。

私はお店のエプロンを外しながら小走りで先生の後を追った。

「先生、何処行くんですか？」

早坂先生はそれには答えず

「お店、大丈夫だった？」

「はい……」　電話には賄いのおばさんが出て、急に気分が悪くなったから家に帰るとウソをついた。（神様ごめんなさ〜い）

後でバレたらヤバイなとは思ってたけど、それはそれ。

大好きな先生に誘われて断るほど　私はワーカホリックじゃありません。

先生の車の車内には爽やかな、ランドリー・リネンの香りが満ちていて、エンジンがかかるとVanHalenのドラムが鳴り出した。

先生がアクセルを踏み、白いセダンは駐車場を後にして夜の闇に包まれていった。

私はこれから自分の行ったことない知らない所へ行くのだと思った。

第七話

「先生、何処行くんですか？」

私は同じ質問を繰り返した。

「何処に行きたい？」

先生がギアを入れながら訊いた。

“ラブホにきまつてるじゃないですか”
まさかね。

「別に何処って…」 私はあまりにも突然の流れに戸惑った。

「じゃあ海を見に行こうか」

海？

そんなロマンチックな所へ連れて行ってくれるの？

「先生、どうして私を連れ出したの？」

私は自分が先生の誘いに何の抵抗もなく乗ったというスタンスは取りたくなかった。どうしてこう意地っ張りなのでしょう。

「どうしてって…君をお店に帰らせなくなかったから」

先生の声がカーステレオにかき消されるほど小さかった。

「先生バイトするの別に構わないって前に言いましたよね」
ちよっと拗ねたように言ってみた。

「うん…」

「じゃあ どうしてなんですか？」

私は少しじれったいとは思いながらも静かな口調で訊いた。

「…うまく言えないけど、君が酔っ払いの相手をするってコト考えるのがイヤなんだ」 先生が淡々とした口調にも拘らず厳しい表情をしているのを私は見逃さなかった。

「なんでそんなコト考えるんですか？ イヤなら考えなきゃいいし先生には関係のないことですよ」 私はわざと明るく言った。

「ホントにそう思うの？」 先生の澄んだ眼が翳った。

「先生 ただのバイトですよ、なんでそんなに拘るんですか？」

「…君が好きだから」

先生がポツリと漏らした。

「……！」

今なんて、今なんて言ったの？ 私、何か聞き間違えた？

ちよつと、カーステのボリューム下げよーよ。

私はステレオ機材のあたりをいじった。

ぐわわあゝゝん！！！！

Highway to the Hell Ummmm……！！！！

爆音が耳を劈いた。

メカに弱い私はとんでもない所を触ってしまった。

ヒエエエゝゝ！

AC／DC様、私は高速道路からこのまま地獄へ堕ちたくはありません。せつかく愛する先生とこれからお出かけすると言うのに。

早坂先生が慌ててステレオのボリュームを下げ、呆れ顔で私をみた。

「ごめんなさい…」私は思いつきり小さくなって謝った。

先生はプツと吹き出し、私も可笑しくなって笑った。

私はバイトをフケたことも早坂先生が“教師”であることも忘れてしまひそうだった。

車の窓から過ぎ去っていく無数の街の灯りを眺めながら、私はこれから行ったことのない海に行くような気がした。

潮の匂いが次第に濃くなった。

「歩こうか…」車のエンジンを止めると先生が言った。

月の光に明るく照らされた海岸に降りるて空を見上げると、満天の星が煌いていた。

私達は履いていた靴を無造作に砂浜に脱ぎ捨て、波打ち際を並んで歩いた。

「寒くない？」先生が言った。

「うん、少し」九月の夜の海岸は風が冷たかった。

引いては寄せてくる潮騒だけが聞こえる。

星空の下で私と先生の距離が縮まっていき、私の心臓は早鐘のよう

に鳴った。

先生はそつと私の手をとりその広い胸に引き寄せた。

嗚呼、私は今まさに愛する人の抱擁を受けようとしているのです。

先生は逞しい両腕を私のちいさな背中に回し、息が詰まりそうな程強く抱きしめた。

「愛してる。気が違いそうなんだ。だからもう、酔っ払いのお酌なんかやめろよ。」

オレだけの葵でいてくれ！」先生が込み上げる感情に押されるように言った。

「先生……！」

いつもの涼やかな瞳とはまったく別の熱を帯びたような眼差しに私は気が遠くなりそうだった。

先生はそのままゆっくりと砂浜に私を倒し、堰を切ったように激しく口づけをした。

「愛してる葵、君のすべてが欲しい」先生の手が私のセーターの裾に掛かった。「ダメ、先生、いけない……」

……というのは私の頭の中での想像に過ぎず、先生は私の密かな期待をビリビリと見事に破いてくれました。

「寒い？　じゃあ　走ろうか」先生がいたずらっぽく眼を言言った。

「ここから向こうのライフガードのハシゴみたいのがあるだろ、あそこまで競争、いい？」

「OK、先生　手加減なしよ。　ヨーイ、ドン！」私も元気に言った。

砂に足を取られて上手く走れないのが可笑しくて私達は笑いながら駆け抜けた。

スタートをかけた私は　ヘッド・スタートのメリットはあったけど、大の男の先生に勝てるわけありません。

300mも走ったかなあ、先生はゴールのハシゴ近くになると砂浜の上をゴロゴロ転がって息を切らしながら笑った。

私達は砂浜の湿った砂でレリーフを作った（やっぱり芸術家さんです）

ハートの形のレリーフを私が拵えると、先生がそれに『A o i』と指で描いた。

「君の作品だから、ちゃんとサインしなくちゃね」

先生は優しい眼を向けて微笑んだ。

体が冷えてくると私たちは、追いかけてっこをして無邪気な子供のように遊んだ。

先生というのがあまりにも楽しくて胸ときめいて 私は時間を忘れた。

もし先生が「そろそろ 帰らなくちゃ」と言い出さなかったら、私は朝まで海辺で過ごしたかった。

「また、誘ってもいい？」

帰りの車の中で先生が訊いた。

「うん、でもバイトの途中でいきなりはダメですよ」

「ゴメン、わかってる」

私は自分の先生に対する気持ちをまだ告げていない。もしかしたら先生は知っているのだろうか。

私の気持ちを既に知っていて、誘ったのだろうか。

二人で海に行った後も、早坂先生は学校ではいつもと同じだった。

けれども一週間で過ぎ、先生は私に個人的には何も言わなかった。

私は先生から何か言ってこないか、また誘ってはこないかと期待していたからこの“沈黙”に不安になった。

二週間経っても先生からは何のお誘いもなく 私から言い出すこともできず悶々とした日々が過ぎていった。

リサ子には海へ行った一件を包み隠さず話してあったから 先生から何も言ってこない苛立ちと不安、そして勝手に期待してしまったバカさ加減を嘆き、ぶちまけた。

「先生も考えてるのかもしれないよ、葵ちゃんとはちがう立場ってもんがあるしさ、もう少し待ってさ」とリサ子は慰めてくれた。

けれども私はそれを“待つ”には幼すぎた。学校で先生に逢う度に辛くなり何も言い出せない自分がもどかしく、また「好きだ」と言っておきながら何事もなかったように振舞う先生に不信すら覚えた。もしかしてあの先生の「好き」はただ師弟としての感情で、それを大幅に勘違いした私ってすごいおバカさん？

私はやっとこの結論に辿りつくと自分がとても情けなく恥ずかしくなり、部活を辞めてしまおうかとさえ思った。こんなトンチンカンな子はタエコお婆さんの飲み屋で酔っ払いのおじさんとカラオケでも唸ってるのがよほどふさわしいのだ。

先生への想いがよほど深かったのか、傷心の私は放課後、授業が終わるとまっすぐに家に帰った。

けれど家に帰ったところで先生を忘れるわけはなく、スケッチブックを開いては先生が直したり お手本を書いた鉛筆やチャコールのあとを指でなぞってみたり部活の皆で撮ったスナップ・ショットの中に先生をさがした。

片思いと言うのはかくも切なく哀しいものなのだろうか。

私はベッドに置いてあるピンク色のレースに縁取られたかなり少女趣味なピローに顔をうずめて泣いた。

次第に私は自分自身を報われぬ恋に悩む美しき乙女、かなわぬ恋に身をやつして死んだオフェリアのように美化し、そのイメージに陶醉し “私はなんと美しく人を愛したの！”と感極まった。

“きっと私の愛をうけるにふさわしい人はこの世にはいないのかもしれない…”

“そのような人はギリシア神話かなんかにでてくる白皙の美青年であって、そんじょそこの偏差値の低い学校のセンセなんかではないのでは。”

私はなんという血迷った想いに囚われていたのかしら。

これはきつと悪魔のしわざに違いない。

マズイ！これはマズイ！ さあ、神父さん呼んで悪魔祓いをして頂きましょう！

エコエコザメラク エコエコアザラク、スベタコロンパールームヨ
ウコソオイデナサイマシ、キャインコパンパンパン……。

さて それから3、4日は経ち、悪魔祓いをしてもらった私は（
ウソです、そんな事はしていません）授業が終わると急いで家に帰
ろうと教室をあとにした。

「葵ちゃん 部活は？ 今日サボるの？」 廊下まで麻里が私を
追ってきた。

「うん……」 お節介なやつじゃ、放っておいてくれよ。

私は早坂先生に遇わないようにさっさと校舎を出てしまったかった。

「どうしたの？ この頃ずっと出てないじゃん、何かあったの？」

「別に、大したことじゃないよ。心配しないで……」

「んならいいんだけどさ、じゃ、部活行くよ。遅れると本條先生
に起られちゃうから」 そう言うとき麻里は廊下を駆けていった。

その後姿を見ながら私は何の屈折した想いもなく、早坂先生の顔を見
れる麻里が羨ましいと思った。

私は重い足どりで昇降口まで行き、靴を履き替えようとした時だ
った。

「どうしたの？ 津田さん、ダメじゃないか部活サボって」

振り返ると早坂先生だった。先生がこっちに向かって歩いてくる。

なんて懐かしいお姿！！ 葵は逢いとうございました。 嗚呼、

私は夢を見ているのでしょうか。先生どうぞ夢なら醒めないで、醒
めぬうちに、さあ私をその腕に抱いて下さいな。

じゃないだろーが。

「あっ、先生」 一番逢いたくて逢いたくない先生がそこにいる。

「心配しちゃったよ、 鈴木さん（麻里）が学校には来てるってい

うのにさ」

「ごめんなさい……」 私は俯いた。

「どうしたの？」

「なんでもありません」

私は先生から眼をそらした。

「なんでもないって顔じゃないぞ」

当たり前です。全然なんでもなくありません、うるうる……。

「先生には関係のないことです」 それでも私は強がった。

「関係なくないよ、オレ 一応顧問だから」

いいえ、先生は非常勤ですもの。 そんな義務はないでしょう。

「それだけですか？」

「……ちがう」 先生は廊下を見回して近くに誰もいないのを確かめると短く言った。

「じゃあ 何故？」

「言ったじゃないか、海に行ったとき。 憶えてないの？」 先生が探るように私の目を見た。

「それは……」

「場所変えて話そうか」 私に真っ直ぐに背をむけると、早坂先生は昇降口の階段を下りていった。

第八話

先生と私は校庭のプール脇にある花壇に腰をおろした。

昇降口で先生が言った、『言ったじゃないか、海に行ったとき、憶えてないの?』というフレーズが私の頭の中で何度も反転した。

やっぱりあれは聞き間違いなんかじゃなくて、先生は私を好きだと言ってるんだ。少しづつその確信が頭の中で固まってくる。

今だ。今を逃せばもう二度と私は気持ちを打ちあけることができないような気がした。

先生の横顔を見つめると私はその視線を捕らえて静かに眼を落とした。

花壇の脇にしゃがみ、グラウンドの土に私はハートのマークを大きく描き、その中に『すき』とひとことだけ書いた。先生はその絵を見てから涼やかな視線を私に向けた。

少しの沈黙の後、先生が口を開いた。

「じゃあどうして部活休んでたの?」困惑した眼で私を見た。

「それは、先生があの後何も言わなかったから」私は逸る胸を押さえて言った。

「そうだったの、ゴメン、何も言わないで。オレ、なんか強引だったかなって後で思ってた。悪かったかなって思ったんだ。津田さんの気持ちなんて考えてなかったんじゃないかって……」先生がひと私を見た。

「いいの。先生は教師だからそんな風に考えちゃうんだよ。でもあの夜も先生、私に何もヘンなことしてないし、悪い事なんかしてないよ」

ヘンなことしても悪くはなかった、という本心は言わず、私はサラッと言った。

先生は誠実すぎて不器用なんだ。

でもその不器用さがたまらなく愛しくて胸キュンで、もし、ここが

学校でなかったら私は迷わずホグホグしていたと思う。

私はこれで早坂先生と相思相愛なのだと思うと天にも昇る心地だった。

お互いの気持ちを確認したと言っても先生と私はやはり教師と生徒、学校以外の場所では人目を憚って逢わなければならなかった。でも秘密を持つ事は私には苦痛でなく、ある意味歓迎しているようなところがあった。

だってそうでしょう？ なんの障害もない、社会的制約もない恋愛なんてふやけたラーメンのように伸びきって味も素っ気もない。

私達の恋愛には危なさや脆さ、そして燃え上がるようなパッションが常に同居していた、とは言わないまでも心弾むような小さなことが楽しかった。

例えば放課後の美術準備室は私達のお気に入りの場所だった。

先生たちの作品やモチーフ等といったガラクタに囲まれながら、それらを整理するひと時。

「津田さん、これ三年生の作品なんだけど、これも文化祭に出すから向こう（美術室）に持って行って」

「はい」

「あとさ、この卒業生のはもう処分してって本條先生が言ったからさ、焼却炉もってっていいよ」

「わかりました」

なんて先生のお手伝いをするのも今まで以上に胸ときめいた。

文化祭の準備は忙しく、部員達が総勢で作品の展示に追われた。そんな時も先生が私と眼が合うたびににっこりとして、それだけで私は十分幸せだった。

先生は美術室付近の廊下に絵を掛ける時も私を誘って手伝わせた。先生が釘と金槌をもち、私が針金をかけていく間、自然に肩が触れ合いそれだけでドキドキしてしまう。

陳列台を運びながらお互いの視線を他の人にわからないように、ちよつと見つめあう。ほんとうに些細なことが私にとっては胸キュンで先生の気持ちを確認する瞬間だったりした。

夕方晩く麻里と私がおやつをかうのにコンビにへ行つた。

「ねえ、葵ちゃん、この間早坂先生に呼ばれてどうだった？」

校舎を出るか出ないかのうちに訊いてきた。

「えゝつ、どうってべつに」

きたきた。麻里は私と早坂先生のこと聞きたくてしょうがない。

「ウツソ、そういう感じじゃなかったよ。葵ちゃんあの後すぐ嬉しそつだったよ。ね、なんかあつたんでしよう？」

麻里には借りがあるので隠す気はなかったけど、あんまり興味深々丸出しなのでちよつと焦らしてみたくなつた。

「部活なんで休んでるんだとか、文化祭の事とか、そんなことだよ」「それで？」

「バイトいきなりフケさせて悪かつたとか言つてた」

「ほんとだよ、あんなコトされたらこつちに気があるのかなつて思つちやうじゃん、ふつー。やっぱさあ、あの先生、芸術の先生だよ、ね、ちよつと変わつてるんだよ。葵ちゃんも苦労するよね、あんな人好きになつちやつてさ」

つてさー、あんた勝手に結論出さないで

「でも やっぱいい人だよ、心配しててくれたし。あのね、先生のことどう思つて訊かれたんだよ」

「エツ、エツ、ホント？」

「うん」

「で、葵ちゃん、なんて言つたの？」
もー、麻里つたら声うわずつてるよ。

「メチャクチャ好きつて言つた」 まあこのくらい脚色してやろう。

「やつたじゃん！」

麻里は私の背中をバシツと思いつき叩いた。痛てっ！

「えゝつ、それでそれで？ どこまでいったの？ 先生と」

麻里、あんたは芸能リポーターかい？

「何もしてないよ」

「えっ？ またあ、ウソでしょー」

ウソって あんた疑い深い人だね。

まあ 三十歳のおじさんと交際って二週間で“ やっちゃった ”麻里にしてみればうそのような話かも。

「うそじゃないよ、ほんとに何も無いよ」

麻里の表情が、信じられないという顔からなにか私を憐れむようにかわった。

「早坂先生ってまじめなんだね」

とガツカリしたように言った。

無理ありません。 当時はこの歳で“ やっちゃった ”子はそんなにいなかったから、麻里は“ 生きた情報 ”に飢えていた。 もつと言えば少数派である“ 経験者 ”はどこかにヤバイという気持ちを保持していたので“ 赤信号みんなで渡ればこわくない ”式に “ やっちゃった ”子が増えれば心強いのだ。

だったらやらなきゃいいのに。

と思うのは「よい子」の葵ちゃんだから言えることで、麻里に言わせれば

“ だって断ると彼氏がすっごい可哀相な顔するんだもん ”

ってそれはあんたの彼氏がおやじだからだよ。

コンビニでみんなの分のおやつを買い麻里と私は学校にもどった。

文化祭が終わると私達はまたもとの生活にもどったけど、私は文化祭フィーバーの後で少し疲れたのだろうか、虚脱感に襲われて二、三日学校を休んだ。

「葵ちゃん 電話よ」

ベッドの上で本を読みながら横になっていると階下から母の声がした。

「誰？」

「美術部の早坂先生よ」言いながら母が私に受話器を渡した。

「もしもし、早坂先生？」 私は疲れも吹っ飛びそうだった。

「うん、今のお母さん？」

「はい」

「体、大丈夫なの？ 鈴木さんから君が休んでるって聞いて心配したんだ」

「もう大丈夫です。明日は学校出られます」 母が近くにいますかなど意識しながら話す。

「明日？ 明日は文化祭の振り替えで休みだよ」

「あつ、そうか、やだ忘れてた」

「ほんとに大丈夫なのかなあ …」 電話の向こうで笑ってる先生。

「学校休んだら日にち 忘れちゃった」

「言わなきゃよかった。そしたら君、一人で学校行ってたね」 まだ笑ってる

「じゃあ…明日大丈夫かな？」

「えっ？」

「出てこれる？」

「はい、今だってもうほとんど元気です」 いや、先生のお誘いであればたとえ熱が四十度あったって出かける。

「そうなんだ、よかった。明日うちにおいでよ」

……それってもしかして先生のマンションに來いってコト？

えっ、そうだよ。 うちってコトはバイト先の研究所でも美術準備室でもなくて……。 すえんせいのおうち！

でも私はまだ実感が湧かなかった。

「先生のお家、ですか？」 これは母に聞かれてはマズイと思いがら小声になった。

「そうだよ、イヤ？」

って…嫌なわけないでしょー、ただびっくりして、それだけだよ。

「イヤなわけありませんですよ、だけどそんな、いいのですか？」

緊張しすぎてヘンな敬語になっちゃった。

先生がまた笑ってる

「明日、十二時で大丈夫？ 駅前の本屋で待ってるよ」

「は、はい。じゃあ明日」

そこで電話はガチャンと切れた。

おおーっ、これって初デート、私と先生の初めての。

それもセンスのおうち、ってことはもしかして……おおーっ！！
わたしの“虚脱感”は一気に吹っ飛びました。

明日、私と先生は遂に“男女の仲”になるのです。

昔っから母が言っていました「男の一人の所に一人で行くという事は一線を越えても良いと言うことで何かされてもこちらは何も言えないんですよ」

何も言うどころかこれこそ“願ったり叶ったり”ではないの。

私は麻里とりサ子に思いつきアツカンベーをしたい気持ちだった。

“先生とは進展がない”というレッテル、汚名、恥をこれで全て挽回できる。

しかも彼らのように“公共の”誰とも知らぬ人々が使用したラブホなんかではなく（オエーっ）

先生と私だけの聖なる愛の空間……。

おお、これこそが私の初めての愛の行為にふさわしい舞台ではないの！

神様、ありがとう！ ハレルヤ！ アーメン！

ところで私はこの晴れの舞台に着ていくべきランジェリー（キャー）に悩んだ。ピンク、白、黒……はたまた赤！ あるいは紫！ いや、何も着けずに！

私は筆筒の引き出しを開け、ああでもない、こうでもないと思い迷った。

その夜は眠れるわけもなく、仕方がないので父の晩酌につきあってウィスキーの水割りを四杯もがっぷり飲んだと思う。正体不明に眠りこけた。

コケコッコー!

ついにその朝になり私は時計を見た。

「ぎゃ~~~~っ」

うそでしょう? これは悪夢にちがいない! もしくはうちの柱時計が狂っているのです!

いいえ、窓の外にはお日様がカンカンと照っているではないの? 十一時四十分!!!!

私は猛ダッシュでシャワーを浴び、ドライヤーで髪を乾かし、ランジェリーは考えてあったけど、う、上に着ていくものが……。

あ~~~~っ 何着てこう?! うお~~~~っ!

バスタオルを体に巻いたまま、二階の部屋に駆け上がり、とりあえずお気に入りのワンピースをハンガーから引き剥がし、それを着ると玄関へ飛び出した。

「いってきま〜ス」

とにかく駅前の本屋さんへ駆けつけた。

ハアハア…ハアハア ゼイゼイ……。

息荒くするのはちょっと早いか。

本屋さんのガラスの自動ドアがゆっくりと開くと私は先生の姿を探した。

本棚の間の狭い通路を歩きながらそこいらを見回した。

「あれっ」

先生は普段かけないメガネをかけて本を読んでいる。

私の立っているところからは横顔しか見えない。

その横顔は凜としていて私はいつまでも見惚れていたほどだった。

先生は私に気が付くと傍に来るように黙って合図をした。

それとなく先生の隣りに立つと、そっと一枚の紙切れを差し出した。みるとそこに先生のマンションの地図があり “離れて付いて来て” と走り書きがしてあった。

先生がレジで本を買っている間、私はその様子を本棚の陰から覗き言われたように後について歩いた。

30分も歩くと通行人も疎らになってきた。先生のマンションは駅から遠く、時々先生が振り返って私のはぐれないようにしてくれた。

長い道程を^{みちのり}テクテクと歩きながら、先生が私と出会うまでにはもつと長い道があったことを思い知らされた。

私より6年先に生まれた先生はどんな道を辿って先生になったのだろう、まさか教え子と恋に陥ちるとは思っていなかっただろう。

学生時代はどんな生徒だったのだろう、彼女はいたのかな。

そんな事を考えているうちに私は先生のコトを少しも知らない自分に気が付いた。

私の知っている先生は部活の先生で学校で美術を教えていて、暑い日でもラーメンをかきこんじゃう人で、海に行ってもロマンチックなことを言いもしない。

もちろん車の中で手も握らない。そのくせ傍によると男の人のパフュームの匂いがして、ふとした表情がすっごく色っぽい。

なぜか急に先生がミステリアスな人に感じられた。

こうして尾行しているのがヘンに似合ってるような謎に満ちた人物。なんなんだろう、もしかしてこの人ゲイ？ それかバイセクシャル？ まさか！ まさか！だよね？

でもさ、芸術家にはゲイの人が多いうって言うよね、もしかして先生のマンションにはそのゲイ友がいて私はその人と先生に輪姦^{まわ}されるのかも：ヒェ~~~~っ！

どうしよう、もしそうだったらこうしてノコノコ付いて行く私って寅の穴のムジナ？じゃなくて、ミイラがミイラ取りじゃなくて、ああ〜なんだっけ？

でも、猟師も懐に入る鳥は撃たないっていうし、だけどやっぱ回れ右しよっかなあ。

「津田さん、この建物だよ」

先生が指差した。

それは櫟並木の通りにある赤レンガに包まれた瀟洒なマンションだ

つ
た。

第九話

先生の住むマンションの周辺はレストラン、カフェ、ベーカリー、それにブティックなどが櫛^{けやき}並木の両側にずらりと並んでいて、どれもが小奇麗な外観の、おしゃれな店構えだった。

中でもヨーロッパの小さなコテージを模したような太い木の窓枠がついたベーカリーが私の目を惹いた。陳列ケースが表に向かって置かれ、その中にお行儀よく並んでいる黒ずぐりや、ラズベリーなど、果実をふんだんに載せ、艶を出したタルトレットは目に鮮やかだった。

「先生、私ケーキを買っていくね、先に行って待ってて」

お店の中に一足踏み込んだだけで甘いバニラと生クリームの香りが私の鼻をくすぐる。

『先生は何が好きだろう』 大小様々で、色とりどりのケーキの中から、私はクリームがどっさり乗ったフレンチシルクパイを選んだ。マンションのエントランスに続く階段を数段上がり、中に入るとそこは外観以上に凝った造りだった。薄い赤茶色と白の大理石の床はピカピカに磨き上げられ、穏やかな波に似た模様を浮き出させた渋い菊^{きくじんいろ}塵色の塗の壁に、縦長の天井まで届くほどの窓が幾つもはめ込まれている。

そのロビーの中央に、上品な細工を施したシャンデリアの灯りで、葡萄色の艶やかなブローケードを張った猫足の椅子やソファがしつとりと調和していた。

『ほんとにここに早坂先生が住んでるの？』

私はお菓子の箱を抱えて、このロビー全体を見回した。

駅前の本屋で先生にもらった紙に書かれた部屋番号の前に着き、私はドアのベルを押すと、インターホンから早坂先生が返事をした。縁取りのあるがっしりとした玄関のドアが開いて、先生が顔を出した。

「いらっしやい、入って」

靴を脱ぎ、先生の案内で居間に通された。

私は驚いた。

目の前にはガーンと広がるリビング／ダイニング・ルームがあり、そこに置いてある家具、調度品のすべてが重みのあるスペイン風で統一されてる。

高校の非常勤講師と美術研究所のバイトを掛け持ちしたって買えるようなしつらえではないと思う。（って私の推測だけど、これは絶対当たってる）

先生って一体何者？

私は先生の住む“マンション”とは アパートよりちょっと格が上くらいのものを想像していたので、このギャップを埋めるのにかかる時間がかかった。

先生は居間からマーブルのカウンターで仕切られているキッチンに回って冷蔵庫を開けた。

「座んなよ。のど渴いただろう、なんか飲む？」

座んなよって、先生、このデカイソファのどこに座ってもいいわけ？

そのソファなるものは私が普段寝ているベットの4倍くらいの大きさでがっしりした木彫りのフレームで囲まれ、そのカーブのついた凹みの前に、丸く厚みのある足のせ台があった。

私はソファに座り、先生が持ってきてくれたコーラを一気に半分くらい飲んだ。

清涼飲料水の泡が喉を刺激し、その喉を収縮するような感じが引くと先生の方を向いた。

「先生って凄い所に住んでるんですね」

つい、信じらんない、みたいな口調で言ってしまった。

「ここは兄貴の家でオレは借りてるって言うか、ハウス・シッターなんだ」

私が勘違いしたのを可笑しそうに言った。

「な〜んだ、びっくりしてソンしちゃった」 早坂先生が分不相応のお家に住んでいる裏にはもっと謎めいたものがあってもよかった。「黙ってればよかったかな？ そしたら来週あたりオレのよからぬ噂が学校で流れてるね。『早坂先生の実体は麻薬密売人か？』とかさ 好きだよな、皆そういうの」

「そんな、言いませんよ。そしたらバレちゃうでしょ、私がここに来た事？」

「あ、そうか、津田さんシャープだね。そういえばさっきも本屋からここまで来るのになんか私立探偵みたいだったよ」
先生がにこにこしながら言った。

「私もそう思った。そしたらこのマンションに来て、ほんとに怪しいじゃないですか。でもよかった、お兄さんのお家なんだあ」

「オレの兄貴さ、海外に駐在でほとんど帰ってこないから代わりに住んでてくれて頼まれてるんだ。 そうですね体は大丈夫なの？ ずいぶん歩かしちゃったね」

「もうすっかり元気です。 文化祭の後片付け休んじやったから皆に迷惑かけちゃったけど」

「なに買ってきたの？」 先生がケーキの箱を指差した。

「フレンチシルクパイ、好きですか？」

「どんなのか見てみないとわかんない」 そう言いながら先生はもう箱開けてる。

「おいしそうだね、ねえ、津田さんご飯食べた？」

「寝坊しちゃったからまだです。先生は？」

「寝坊かあ、それで遅れたんだ。 ああ、オレ？ うん、なんか食べようか」

先生はそう言うのとすつくと立ち上がって電話の置いてあるカウンタ―に行き、レストランのメニューを持ってきた。

「本当はどっか連れて行ってあげたいけど、万が一知ってる人に見られるってこともあるからここで我慢して」 先生がちよっとすまなそうに言った。

「気にしないで下さい。私そんな事はいいの。それより今日、こうして先生に逢えたことのほうがうれしいから」

「ほんと？」 先生の眼が嬉しそうに輝いた。

こんな素敵なお部屋で先生と一緒にいられるなんて、いいえ、仮に先生のお家がこれ程豪華でなくたって私は一向に構わないのに。

私はそれなりに落ち着きを取り戻して部屋の中を眺めた。

居間の壁には先生の作品と思われる幾つかの油彩画が飾られていた。これらの絵はみんな額に入っていて不思議とこのゴージャスな居間に調和してた。

その一つは殆ど無彩色、無機質なビルが林立するのを背景にして星が一つ輝き、生命感に溢れる赤ん坊が今にも目を醒まささんばかりの表情で小さな箱に寝かされている。

私はその一枚の絵に引き寄せられた。

出前のピザを食べながら私は先生にその絵について聞いた。

「随分前だけど、オレの兄貴にキリストの降誕にちなんだ絵を描いてくれて頼まれたんだ」 先生はソファの後ろに掛かっているその絵を振り返りながら言った。

「ふーん、でもキリストは貧しい馬小屋で産まれたんですよね？」 僅かながらもクリスマスのお話くらいは私も知っていた。

「うん」 先生はピザを口一杯に頬張ったためか、口を結んだままそれだけ言うのがやっとだ。

「ちょっと変じゃないかなあ、っていうか先生、この絵は聖書に書かれてる通りの描写ではないですよね」 先生の向かい側に座った私は上目遣いで絵を見て言った。

「確かにネ、オレが描いたのは現代に生きている『キリスト』っていうか、そんな意味を込めて描いたんだ」 先生の目が真剣になった。

「現代に生きる？ わかんないなあ、だってキリストは二千年も昔の人でしょ？」

「キリストというのは救世主という意味だけど、これはわかる？」

「この世の人々を救うって意味ですか？」

「そうだよ。津田さんよく知ってるね」

「私、小さい時キリスト教の保育園に通っていて、そこに来る牧師さんからいろんな聖書のお話を聞いたんです」

「そうだったの」 先生が何故か嬉しそうに私を見た。

「じゃあ下手なもん描けないなあ」 先生はちよつと照れたように言った。

「だけどそんな昔に聞いたこと、よくは憶えてないですよ」

「保育園のときじゃ、無理ないよ。ねえ、ユダヤの人達はね、長い間、それこそ何百年という間、他の国の支配を受けて奴隷として労役についてたんだよ。」

このこと、聞いたことある？」 先生が軽く首を傾げて私を見た。

「うん、なんとなくそんなことを聞いたような気がするけど」 遠い国の遠い昔の話だ、それほどピンとはこない。

「その何百年も奴隷であったということ、つまり、なん世代もの間、彼等は眼で見ることでできない重い鎖に繋がれていたってことだよ」 先生が言おうとしていることが掴みかねた。この絵の赤ん坊のキリストと、今先生が話しているユダヤ人の長い奴隷の歴史とがどういうふうにつながるんだろう。

「それがさ、もしかすると現代に生きる人々と共通しているんじゃないかと思うんだ。奴隷としての無報酬の労役と、ちゃんと給料をもらって労働しているっていうことは違うけれど、それ以外に今の人達が何かの奴隷になっている、しかもその状態があまりに長く続いているので、そのこと自体に気がつかないってことがあるんじゃないかな？」

ここまで聞いて私の頭は少し混乱してきた。

「例えばここに金銭欲に捉われている人がいるとするよね、その人はつまり『お金』というものの奴隷になってるってことにならないかな。」

つまりさ、心が常にその『お金』に縛られていて自由じゃないんだよ」

この説明はなんとなく私にも理解できた。タエコおばさんの店でバイトしていてお金にまつわるゴタゴタはよく聞いていた。

「つまりさ、その人間を縛っている諸々の手枷、足枷を解き放つのがキリストの一つの目的なわけだけど、この絵の中のキリストはまだ赤ん坊でその力を発揮するには幼すぎるんなんだ。それはね、オレ自身の中にまだ沢山の手枷、足枷があってそれを解いてくれる『何か』を待っているような、そんな部分があるんだよ。

だけどここにキリストが生まれたことを見るとき、そこに希望があるんだ。

いや、希望なんていう弱いものじゃなくて、むしろ『確信』と言えるかもしれない」

先生はそこまで熱っぽく語ると澄んだ瞳をじっと私に注いだ。

瞬間 私は“この人が本当に好きだ”と思った。

普段あまり饒舌ではない先生が、ありのままの想いをさらけ出すのがキャンバスの中なんだ。

そしてこの人は本当に真剣に絵を描いている。

「なんか難しい話、しちゃったかなあ」先生はちよつと恥ずかしそうにケーキの箱を開けると目を輝かしてその丸いフレンチシルク・パイを取り出した。

こんもりとクリームが載せられているパイを見て、ろうそくがあったらよかったね、と先生は言った。私が訳を訊くと、初めてのデザートだからそのお祝いに、パイのど真ん中に火を燈したろうそくが欲しかったらしい。

そんな無邪気な先生がまた一段と愛しく感じられて私は胸を揺すぶられた。

程よく甘くふんわりとしたクリームは、ほろ苦いチョコレートと味と相まって、まるで先生と私の人目を避けなければならぬ恋のようだと思った。

続く

第十話

その夜、私は家に帰ってから先生の家であつた事を一つづつ思い返していた。

二人きりになったからと言って私の体に触れてくるでもなく、先生は単純に私といて楽しいという感じだった。

前日は先生とどうかなるコトを半ば期待していたのだから、今日の先生の私に対する接し方を幾分不満に思つてもいい筈なのに、自分でも驚くほどかえってそれがうれしかった。

以前交際つた男の人の中に『俺は大人の付き合いをするからそのつもりで』と言つた人がいた。

きちんと予告をしたことで私を承知させ、納得させ、そんな彼自身を正当化したかつたのだろ^うが、そんな形で“肉体関係ありの付き合い”を示唆することが、いかにも狡^{ずる}いやり方に思えて私は一氣に引いてしまった。

以来、私は彼の手を見ただけで何か穢いものに感じられて生理的に受け付けられなくなった。

“現代のキリスト” 早坂先生が描いたあの赤ん坊はまさしく神の子としてこの世に遣わされたイエスであり、触ればどろりとするようなあの夜の闇はこの世の象徴ともいえた。

暗闇の中に眩^{まはゆ}く光る星が、イエスの生まれた場所を示しているのは聖書と同じ表現だった。

ともすれば重い背景の色のために全体が暗くなりそうな作品に、星の瞬きと生命力に満ちた赤ん坊の存在がキャンバス全体を力強く希望に溢れたものにしていて。この絵を頭の中で描き出しながら、私は今日まで早坂先生という人を知らな過ぎたと思つた。

先生は言つたのだ。

「オレのこと、よく知つたら君の気持ちが変わるかもしれない」

それは不安げに呟いたというより単に事実としてさらりと告白した

ように私には聞こえた。

むしろそんなことを考えながらも私にキリストの絵を通して自分を見せてくれた先生を正直で飾らない人だと思った。

冬休みに入るとすぐ、早坂先生が電話をかけてきた。

「津田さん、今度の日曜日、あいてるかな？」

日曜日に限らず冬休みは部活もなく、タエコおぼさんの飲み屋のバイトの他に特になにもすることは無い。もちろん先生のお誘いであれば、仮に忙しかったとしても、他の予定をクリアしてスケジュールに詰め込むつもりだった。

「あいてますよ」 私は逸る気持ちを抑えつつ言った。

「よかった、君をいい所に連れて行ってあげたいんだ。そんなに遠くじゃないから車で迎えに行くよ。じゃあ夕方六時にまた例の本屋さんで待ち合わせしようか」

先生は私の気持ちを確認するように言った。

「はい」

「今度は遅刻しないようにね」 先生が優しく付け加えた。

短い会話、というかデートの約束をとりつけ、私はまたまた天にも昇る心地だった。これで名実と共に先生と私は『交際つきあっている』といえる。

そう考えて私の胸はなんともいえない甘酸っぱさに満たされた。

ところで早坂先生の言う『いい所』とは一体どこだろう？

『そんなに遠くない所』

それが先生のマンションではないことは明白だった。一度おじやましたのだから、もう一度呼ばれるとしたら、先生はそう言うだろう。何も勿体つけるほどのことではない。一瞬、ラブホではないかとも思ったが、それなら先生のマンションを使えばいいことだ、何もそんな所へわざわざ人目に触れる危険を冒してまで行くことはない。

そう考えてから、私は自分が何て耳年寄りで先走ったことばかり想像するのかと呆れた。

とは言うものの、行き先が知れないということは、私の想像をいたずらに掻き立て、

私は空想の風船を幾つも思いっきり膨らませた。

ひとつが膨らみすぎて弾けてしまうと、もう一つを膨らませる。

こんな愉しい作業を繰り返しながら、私は早坂先生の澄んだ眼や、私の胸を熱く溶かしてしまいそうになるあの、パフュームの香りなんかを思い出していた。

さてその晩、私は父のウイスキーにも手をつけずに、念入りにお風呂に入り、髪の毛をカラーで丁寧に巻いた。

こうして明日の朝、私は極めて乙女チックに装う予定だった。

行き先がわからないとなると、今ひとつ着る物を選ぶのに苦労するのだったが、そこは私の独断と偏見で『とにかく可愛く魅せる』ことを目標に、品のよい黒と白の格子柄のワンピースを着ていくことにした。

なにせ今回は『遅刻しない』ということが私の頭にこびりついている。

前日までに万端の準備をするのだ。

おとといは毛穴のお掃除パックもしたし、見えないとはいえ、無駄毛の処理も完璧にし、ついでに全身の肌に艶を与えるためにマッサ―ジも欠かさなかった。

私は上客の前に立つ芸妓さながらに磨きたて、その自分を鏡に映しては『なかなか捨てたもんじゃないな』とか『いや、もう少しだけ顔が細かったらよかった』

などと勝手な批評を試してみた。

いよいよ待ちに待った日曜日が来た。

先生は約束どおり本屋さんで本を読みながら待っていた。

「おはようございます」 私が先生の傍によって小さな声で挨拶すると、先生はニコリと笑みを浮かべた。

「おはよう、津田さん。 すごい可愛いなあ、お人形みたいだね、その髪」

まるで初めて私を見るみたいな眼をした。

いや、苦勞して捲いた甲斐があったよ。 しかもカーラーを捲いたまま寝るのってラクじゃないんだよね。 けど先生の眼に美しく映るためであれば熱い砂風呂だろうが、悲鳴なしでは行えないというブラジリアン・ワックスだって平気なのだ。

いや、それはツルンツルンであることが『美』であると、彼が思えばの話なんだけど。

そこで私はハタと気づいた。

高校生の私を『好きだ』と言う先生はもしかしてロリの気があるのかな？

だったらやっぱりブラジリアン・ワックスは、やっておいた方がよかったのかもしれない。 ついでに髪の毛もただの巻き髪で満足せずに、ツインテールかなんかでとことんロリを演じた方がよかったのか。

待てよ、しかしロリっつーのは私よりもっと幼い女の子が対象の筈だ。 だったらやっぱりこのままで、あるがままのナチュラル・ビューティでいいんだよね。

この場に及んで私は詰めが甘くなかったかと自問自答していた。

「どうしたの？津田さん」

ハンドルを握りながら先生が私をチラッと横目で見た。

「あ、いえ何でもありません」

私は先生に心の中を見透かされたような気がして頬が熱くなった。

「そう、ならいいんだけどさ。 何か考えごとしてるみたいだったから」

そう、そうなんです。 考えごと、してました。 でも何を考えてたなんて、絶対に言えない。 『先生ってロリ好き？』なんてね。 いや、

もしかして訊いてみたら、案外サラリと言うかもしれない。

『好きなのは、君だけだよ』とかなんとかさ。

そういえば最近っていうか、あの花壇での告白以来、先生から『好きだ』という言葉聞いてない。こうやって誘ってくれるんだからわざわざ確認しなくたっていいとは思うけど、やっぱり逢うたびに聞いてみたいのが女心。

車を降り立つと、そこが教会である事は尖塔に立てられている十字架でわかった。

教会の建物が尖塔から漏れている青白い光に照らし出され、夕闇の中にぼおっと浮かんでいる。そこだけが別世界のような雰囲気だった。

中に入り、アーチ型の入り口の真正面に聖壇があり、たくさんのキヤンドルの灯が壁に掛けられた大きな十字架を照らしていた。

私達は聖堂の長いベンチのような木の椅子に並んで腰をかけ、私は誰にともなく呟いた。

「いい所って教会の事だったのね」自然に目が正面の十字架にいった。

「驚いた？」先生が言った。

「ちょっとだけね、だってまさか先生が教会に連れて行ってくれるとは思っていなかったから」

『ちょっとだけ』というのは真っ赤な嘘で、実はすごく驚いていた。保育園時代に牧師さんと接触があったとはいえ、その後、十何年もこうした宗教的な厳かな雰囲気には触れていなかった。

私は高い天井とそれを支える天に聳え立つようなアーチを描いた柱、それから窓という窓にはめ込まれた色鮮やかなステンドグラスを眺めながらつくづく美しいと思った。

多分、どんな悪人でもこの聖堂に足を踏み入れたなら、厳粛な気持ちになるのじゃないかしら……。

礼拝の時間が近づいたのか次々と座席が埋まっていき、澄んだオ

ルガンの音色が聖堂に広がった。

後から来た人の中には早坂先生のお兄さんがいて、クリスマスとお正月を郷里で過ごすために仕事の赴任先から一時帰国しているという。

お兄さんは早坂先生よりかなり年上らしく、きちんとスーツを着て、長椅子に座ると、先生と私に軽く会釈した。

牧師さんの説教は“クリスマスは誰のためにあるのか”と題され、それが週報という紙に載っていた。

「罪を犯さずには生きていけないのが人間であり、そのために神はイエスをこの地上に遣わし、私たちの罪を十字架につけ、その罪を永遠に葬る為に人のかたちをとって生まれてきました」 と牧師は話された。

「聖書に書かれている罪というのは法律で裁かれるものに限らず、人の穢れた思い、すなわち妬み、強欲、憎しみ、情欲も、それに当たる。」

神から視たら人の心は穢れに満ち、その心に罪を抱き、罪の奴隷になったままでは天国に入ることができないので、イエスの尊い血によってその罪を贖い、それを信じることによって人は天国へ行くという永遠のいのちを得る。これがすなわち恵みである」 そのような事を一つづつ牧師は話した。

「つまりこの恵みに与かること、これが神から人へのプレゼントであり、私達は信じてそのプレゼントを受けただけでよい」というシンプル且つわかりやすい（ほんとかよ）説教だった。

いやあ、難しかった。そしてその退屈さの度合いは学校の古文、漢文の授業にも等しかった。

はつきり申しまして（ってなんでここで敬語になるんだ）私は途中で欠伸がでそうになり、それを先生にみられたらいけないと遠慮をし、堪える為に必死だったせいか涙まで出た。

礼拝が終わる頃、私達にそれぞれ小さな一本のろうそくが配られ、その間に牧師さんの祈りが捧げられた。

それは今まで私が経験した事のない、神聖で美しい光景だった。

説教は退屈であっても、このような目に見える『儀式』めいたものは何故かありがたく感じられるのが不思議だ。

そのキャンドル・サービスという儀式は、ほの暗い聖堂にあって人々が翳とするろうそくの灯のみがポツリポツリと揺らめき、厳かに奏でられるオルガンの音にのせて、もったいぶるようにゆっくりと行なわれた。

『早くお祈りを終わりにしてくれ、ろうそくが融けて、手が熱いんだよ』

私は薄目を開け、そう思うのは自分だけだろうか、隣りの列の長椅子でお祈りをしている信者さんの手元を見た。

驚いたことに彼らのろうそくは私のよりもずっと燃えかたが遅いのか、ろうそくの長さを十分に残している。

『まさか……。そんなバカな!』

自分の手を今にも焼かんばかりのちびかけたらうそくと、その信者さんのまだ十分に長さを保っているろうそくを交互に見て私は突然、背中から冷や水を浴びせられたようにゾツとした。

『ああ、もしかしてこのろうそくの灯の熱さは、罪深い私が地獄の火にでも炙られるという、これはそのオーメンなのかもしれない』
私はさらに隣りに座っている先生を視た。

俯いてじっと目を閉じたその横顔は、まるでキリストの信徒そのものであるかのように清廉だった。私はこんなにも清らかで穢れのない輝きに満ちた人を今までに知らないと思った。

先生の祈るその姿は透明感のある光に包まれていて私は息を呑んで見つめた。

その先生と見比べ私は自分の業の深さを思い知った。

その刹那、私の手に融けたろうそくが滴った。

ひえーっ！ 助けてえー！！

私は恐怖のあまり、顔が引きつり、出ない声を押し殺すようにして押し沈めた。

きつとこれは罪のない清らかな早坂先生を少しでも情欲の世界に引きずり込もうと思ったことへの天罰に違いない。

そう考えると私はもう、居ても立ってもいられなくなった。

「先生……」 私は先生の顔をヒタと見つめた。

「ん？」 先生が私の方を見ながら『フッ』と、持っているろうそくの灯を消した。

「あ……？」

「こっちの列から火をつけていったからね、短くなっちゃったね。ろうそく」

先生がろうそくの火を消した言い訳を私の耳元で囁いた。

『えっ？ ああ、そういうことだったんだ』

知らないうちに私は緊張していたので、私たちのろうそくが隣りの列のろうそくよりも先に火がつけられていたことなど念頭にいれていなかった。

『なんだ、ビックリしたなあ、もう』

オーメンでも天罰でもなかった。

続く

第十一話（前書き）

いよいよ『蒼いパレット』の後半にさしかかりました。
教師と生徒の私たちの恋の行方、そして私は先生の世界に一足踏み込んだものを見た。

第十一話

なにか自分の知らない世界を先生が知っている、或いはそこに先生は生きているという確かな、しかも不思議な感覚が私の心に染み入った。

「先生 キャンドル・サービスの時 真剣にお祈りをしてたけど、何をお願いしていたんですか？」

礼拝の後、先生と先生のお兄さんの三人で行ったレストランで私は訊いた。

「君に たくさん神様のみ恵みがありますようにって……」

先生はちよつと赤くなつて言った。

「ほんと？ 先生でも私、これ以上そんなに欲しい物はないし、だつてこうして先生と一緒にいられるし先生の素敵なお兄様にだつて逢えたし、それに……」

事実、私はまあまあ現状に満足してた。

ワリのいいバイトもあるし、両親はあまり口うるさくもない、つてそれは先生とのコト知らないからだけど。 それなりにいい友達もいる。

「素敵なお兄様かあ、ありがとう葵さん。僕はター坊と歳も離れてるし仕事が忙しいから、あまりいい兄らしいこともしていないけど。 そんな風に見てくれると嬉しいですよ」

先生のお兄さん、聖也さんがちよつと胸をそらしてみせた。

「いい兄貴だよ、津田さんとオレにデートの場所、提供できるのは兄貴だけだから今のところ」先生はそう言つて私の方を見た。

『先生はお兄さんに私と交際つてること言つたんだ』

歳は離れているけど、この兄弟はかなり気心が知れているらしい。

「ちゃっかりしてるというか呑気というか、こんなんでは先生ちゃんと務まつてるのかなあ、ター坊は」 聖也さんがヤレヤレという風に先生を見た。

けれど私たちが交際していることについてお兄さんは何も言わなかった。

もっとも交際しているといってもまだ始まったばかりだけど。

お説教めいたコトを私の手前、言わなかったのか、それとも弟である早坂先生の私生活についてとやかく言わない主義なのか、そのへんは私に分かりかねたけど、そんなお兄さんは私にとって窮屈な感じを与えなかった。

恐らくそうしたお兄さんだから先生は私のことも話したのだろう。

「そういえば津田さん、教会は久しぶりなんだよね。どうだった？ 牧師さんの説教、なんか難しいと思わなかった？」 早坂先生はベイグド・ポテトの銀紙をはずしながら言った。

「はい、難しかったっていえば、そうですね」

正直言って難しいし退屈だというのが私の感想だったけど、こうしてお兄さんまで紹介してくれた先生の気持を思うとネガティブな意見は言いたくなかった。

「津田さん、涙を浮かべて牧師先生の話きいてたからさ。オレ、津田さんって純真な心を持ってる子だなんてうれしくなっちゃった」そう無邪気に言う先生を見て私は後ろめたい想いにかられた。

そう、あれは感動の涙なんかじゃなくて欠伸を堪えた涙だったのに。私はドロドロと濁った自分の心を手で触ったような気がした。

もし、早坂先生が私の心の中をのぞくことができたなら、先生はそれでも私を好きだといってくれるだろうか？ それはきっと有り得ないことのように思う。

私はしごく俗っぽくて、浅い考えの平凡な子なんだから。

聖也さんと先生は食事の後、私を家まで送ってくれた。

私の母は？ 先生と先生のお兄様“が私に付き添って教会へ行き、夕飯まで御馳走になったことに恐縮して深々と頭を下げた。

その母を見て先生が一層深々と頭を下げた時、私は母に隠し事をしている先生が謝っているように見えた。

「なんと言っても君はまだ未成年なのだから」と先生が折々に言っていた言葉を思い出して、先生が私だけではなく私の両親にも責任を感じていると思ったのはこれが初めてで私は二人が交際うことの重さをずしんと感じた。

とは言え、なにぶん私は十七歳やそこの乙女であった。

両親への義理VS、先生への気持ち、ということになると俄然、後者に白旗が上ってしまう。

三学期になり美術室で絵筆を洗っていると私の傍に早坂先生が来て手伝いながら私達は顔を見合わせて微笑んだ。

たまにこんな風にひっそりと意味あり気に微笑んだりすることくらいが内緒で『好き』と伝え合う時だった。

クリスマスを機会に私は度々教会を訪ねるようになっていた。

私が教会に通うことに両親はどちらかと言えば好意的だったのはありがたかった。

尤も、子供の頃、キリスト教の息のかかった保育園に私を入園させたのだから、

反対はしないとは予測してた。

両親とも、まさか私が教会に行き始めた動機が、先生と一緒に居たいからだなどとは思ってもみない。

何度か教会に行くうち私は牧師先生とも親しく話をするようになっていた。

ところでこの『牧師先生』というのは、ヘンな言葉で『牧師』か『先生』のどちらかで呼べばいいのに私はいつもそう呼んでいた。

その一つの理由には『牧師さん』と『さん』づけで呼ぶには、この先生は目上すぎた。

年齢もさることながら、『神に仕える』という、とてつもない大きな使命を負っているということが『さん』だけで呼ぶのを控えさせた。

もう一つは単に『先生』だけだと、早坂先生と混同してしまう。他にも教会員の中に学校の先生やお医者さんなどが教会に来ていたから、敢て私はこの『牧師先生』という呼び方を使った。

牧師先生は上品な顔立ちで、日曜毎に着る式服はとてもきちんとしていて、皺ひとつないように整えられていたけど、平日に説教の原稿をお家（といっても教会の敷地にある古びた家屋だった）で書かれているときや、信者さんの相談などをされている日は極めて質素な服装だった。

その簡素な部分は生活のいたるところで目に入った。

牧師夫妻のお家は、必要最低限の家具しかなくて、テレビなんかは本当に古い型のもので、もちろん一台しかないようだったし、台所の椅子やテーブルなんかにも何十年にも亘って使い古しているような品だった。

そのかわり、と言ってはなんだけど本、これだけは沢山あった。

日本語のキリスト教関連のものはもちろん、英語やギリシャ語（かな？）

その他、信者さんのキリストに関わる証の手作りの小冊子みたいなのが山程あった。

こう言うと牧師先生はいかにも清貧のような印象だけど、『清貧』という言葉に連想されるひたむきさとは少し違っていた。

単にシンプルな生活様式、いつも片付けられている家、規律というものが極自然に穏やかに守られているという感じだった。

牧師先生は初めに私が思ったよりもずっと親しみやすい人で、私の学校生活やバイトの事など面白がって話を聞いてくれた。

飲み屋などでバイトしている私を咎めたりするようなこともしなかった。寧ろ、私が教会で聴いた話をアルバイト先でするように励ましてくれるほどだった。

そんな牧師さんだったから私はリサ子も誘って教会のボランティアの手伝いもするようになった。

リサ子はギターが弾けたから皆で集まってワーシップ・ソングな

どを歌うとき重宝されてのちに、自ら進んで大学生の信徒や同じ年頃の子を集め、小さな集会を持つまでに至った。

牧師先生は常日頃から言っていた。

「教会は完璧な人が来るところではありません。心や体に問題や悩みのある人、

不完全な人、そういう人が大手を振って来るところです。イエス様によって癒していただく療養所、または疲れた人がどっかり重い荷物を降ろして休む場所です」

“丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしが（イエス）来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである”

（マルコによる福音書二章十七章）

私はこの初老の牧師先生を敬愛した。それは私が今までの、どの学校の先生にも見たことのない慈愛に満ち、しかも謙遜な方だった。

牧師先生は高校生や大学生に対しても他の大人に対するのと同じように敬意をもって接してくれ、決して頭ごなしにお説教を垂れたり、口先だけで訓えるという事をしなかった。

この先生と出会ったことは後々、私に大きな影響を与えた。

バレンタインデーが来た。

そのころ先生は研究所での仕事が忙しくて学校以外の場所で逢えなかった。

それでも先生と私は、この日だけは一緒に過ごしたいと思っていた。

放課後の部活が終わった後、先生と私は先生のマンションで落ち合

うことになっていた。

制服を着替える為に私は一旦、家に帰り先生のマンションへ向かった。

寒い日だった。

白い息を吐きながら先生に逢いに行くこの道を何度私は通っただろう。

二人だけの時間を持つために安全といえるのは、あの瀟洒な煉瓦建てのビルの中だけだった。

外の寒気と共に玄関に入る私を、先生が迎えた。

「久々だね、こうして二人だけで過ごすのって」

第十二話（前書き）

『蒼パレ』もいよいよ後半に突入でございます。

読者の皆様には本当に感謝です。

また気合を入れて書かせて頂きます。

よろしくお願いします。

第十二話

外は雪が降っていて私の髪にも肩にも雪片がついてる。

玄関でそれを払い落としていると、

「寒かっただろう」

先生が私の手をそっと握り自分の温かな手に包んでくれた。

「先生の手、温かい」

今まで早坂先生がそんな風に私の手を握ったことなんてなかったから、もうそれだけ言うのが精一杯だった。

先生は私の手をそのまま自分の胸に押し当て、しばらく黙って私を見つめた。

先生の心臓の鼓動が私の手に伝わり、それが私の胸にも伝染するよう感じた。

この人がこんなに近くにいます。

胸が速い。

私は先生の体温と胸の鼓動から気をそらせるために、先生の顔を見ると、そこで熱を帯びたような眼差しに出会って、逃げ場がなくなりました。

「好き、愛してるよ」

先生は言い、私をきつく抱きしめた。

先生の温かさ、胸の鼓動、幽かなパフュームとテレピン油の匂い。

私はそれが確かに夢なんかではなく現実だと感じた。

あまり感情を露に出した事のない先生が、この時、熱ととにかく私のわからない衝動に駆られているような気がした。

先生の口から“愛してる”と言われたのもこれが初めてだった。

その胸の中で眼を閉じると、私は先生と本当に二人だけの世界に埋もれ、何もかもがその外へ追いやられた。

それは単に好きとか一緒に居たいというだけでなく、この人の髪の本からつま先まですべてを愛しむような初めて抱いた感情だった。

た。

外気の冷気で冷え切った体を先生はそうして暫く抱いてくれた。

思いがけない抱擁の後、私は持ってきた先生へのプレゼント、バレンタインに相応しい、真っ赤なりボンをかけたハート型の箱に入ったチョコレートの詰め合わせを 渡した。

「これ、オレにくれるの？」

先生が言っただけ私の目を覗いた。

「そう、バレンタインデーでしょ？」

こんなことを訊く先生がなんだか可笑しくて私は微笑んだ。

「わあ、ありがとう」

先生は子供みたいに眼を輝かせた。

そのお菓子の箱は 大学ノートよりひと回りは大きかっただろうか、先生が箱を開けると様々な形のビターチョコレートやミルクチョコレートが上品にならんできた。

「全部先生が食べていいのよ」

その無邪気な表情を眺めながら私はちよつとすまして言った。

「義理チョコじゃないのもらうのなんて初めて」

先生は嬉しそうにその一つを口に入れた。

「それ本当？」

私は先生が初めて本命チョコをもらったということが信じられない。以前、先生は『片思い』くらいはしたことあるって言ってたけど。

とにかく私は先生の『ファースト・タイム』になったことに言いようのない満足を感じた。 何故なら、それは私のファースト・バレンタインだったから。

先生と私はチョコレートの箱を囲んで居間のソファに座った。

缶コーラを飲みながら学校の話、部活の話をしていた。

「このあいだね、オレ、教頭先生に呼ばれたんだ」

いつもと変わらない訥々とした口調だったけど、教頭先生というのがひっかった。もしかして私たちのことがバレたのかと思い、私は先生に向かってはっと顔を上げた。

「先生、もしかして……」

「違うよ、そんなんじゃないよ」

先生は遮るように言ってから続けた。

「オレ、来年から本採用になるよ」

「えっ、本当？」

「うん」

「すごいね、そしたら担任のクラスとかも持つの？」

うちの学校は毎年クラス替えがあるから、先生が本採用になって担任になったら、

どうしようかと思う。

そんなことになったら私は先生の顔を朝から見ることになって、冷静に振舞えなくなる。 うーん、それは困るよ。

部活くらいで知った顔の部員達と先生と一緒に居るのはちよつとワケが違う。

「うん、クラスは持たないけど授業のコマ数は増えるよ」

「ほんとう？　じゃ、三年生の美術の授業も先生が教えるの？」

その程度なら構わない。 美術の授業は週に二コマしかない。

「多分三年生は本條先生が受け持つよ、オレは一年生の授業かな」
なんだあ、じゃあんまり今と変わらないっつーか同じか。

しかも三年生は一学期いっぱい部活は引退である、当然の如く学校で先生に会う機会は減ってしまう。

「でも研究所のバイトはしなくてよくなるよ」

チョコレートを摘みながら先生が言った。

私はそれが何を意味しているのか一瞬分からなかった。

「春休みとか夏休みはホントにお休みだし、夕方学校が退けたらフリーだから学校で逢えなくても、こうやってもつと逢えるかも。

ああ、でも津田さん受験だよ」

先生がそこで喋るのをやめた。

『受験』というのは高校三年生にとってまるで戦争にでも行くような、非情で逃れることのできないという語感がある。

『美術』みたいな入試に関係ないような学科を教えていても、高校の教師である先生にとってやはり他人事ではないのだ。

うちの高校のように偏差値の低い（と、はっきりレベルを貼ってしまう）ところでは、取りあえず、どんな大学にでも生徒が合格すれば『御の字』で、哀しいかな、普通の高校生が滑り止めに受けるような大学でも、それが四年制大学であつたりしたら、そこに受かるだけでも名誉なことなのだ。

もちろんお勉強の大嫌いな私はそんな気はサラサラない。

つまり、大学受験などという難関に敢て挑む気もなければ、この先、四年間もお勉強にどっぷり浸かる事など考えられなかった。

「私は大学には行かないの」

いつの間にか先生にプレゼントしたチョコレートに手をつけながら言った。

箱に詰められた小さなチョコレートの群れはあまりにも甘い誘惑であつた。

そう『甘い誘惑』……。

これこそが万人の心を溶かし、揺るがせて、善悪の見きわめ、前後の見境なく男女が禁區に踏み入ってしまった、泥沼に堕ちこみ、抜き差しならぬ状態へと引き入れてしまう罠だ。

不倫、上司と直属の部下、牧師と信者、男&男、女&女、スパイと潜入先、芸能人とそのマネージャー、果ては親近相姦、獣姦……
なんとおぞましいことよ！

しかし、これは普通の真理と言っても過言ではない。事実、この世にどれほど多くの人間がこのような深みにハマって苦しみ、もがき、喘いでいることか！

読者の皆様、周りをご覧になって、あなたの周りに一体何人の人が、そのような苦境に立たされて今も悶絶しているか……。

あれっ？そういう話だっけ？

違ったよね。

話を元にもどそう。

「えっ、津田さん大学には行かないの？」

先生が驚いたように言った。

部活の顧問だけやっているから私の成績までは知らない。

先生が知っているのは私に「絵の才能」が少なからずでもあるということだけ。

と、言っても地域の展覧会で賞をもらう程度のことだ。ここで初めて先生は私のオツムの程度を改めて知らされたのかも。

「私ね、B服飾デザイン学院に行こうと思ってるの。うちの母もそこへ行ったし、いい学校だって聞いてるから」

B服飾デザインは、その道では知らない人はいない。ファッション業界の登竜門、それ関係の学校では大御所だった。有名なデザイナーをごまんと輩出している。

「へえ、津田さんはデザイナーになりたいの？」

「うん、まだよくわからないけど、そっち方面の勉強がしたいなって」

ここで堂々と『世界に名を馳せるファッション・デザイナーになりたい』と豪語できないところが私のヘタレである所以で、何のことはない、私は『お針仕事』というのが無類の苦手だった。今考えると無謀な選択としか言いようがないこのB学院への進学なのだけど、この頃はまだそこまで無謀だとは思っていなかったから、おめでたい。

何しろ家庭科の授業で調理実習よりも、レース編みだとか縫い物、そんなのに苦労させられたのを全く無視してたのだから。

嗚呼、あのB服装学院でこっそりしぼられた想い出は、卒業後も夢に出てきて眼を醒ますと額に汗をかくほどだった。

進路の選択をまちがったと思ったのは後の祭りであった。いや、しかしあの時、『有名デザイナーになりたい』と、豪語しなかっただけでも私は赤っ恥かかなくて済んだんだ。情けね。って、それはいいんだけどさ。

続く

第十三話

勉強は嫌い、手仕事は×、おまけに飲み屋で堂々とバイトしているような私のどが気に入って先生は付き合ってくれているのか、その辺は私には分からない。

これが『恋は盲目』というなら早坂先生はお墨付きの『全盲』だった。

「じゃあ受験はないんだ、よかったね」

先生は半ば嬉しそうに言って、私の顔を見た。

「そう、だからこうして先生の所にも遊びに来れるよ」

その時先生の顔に一抹の不安がよぎったのを私は見逃さなかった。

「それはいいんだけどさ、って言うかオレは嬉しい。そう言ってもええと。でもお家の人心配するんじゃない？」

「どうして？ 先生のお家に来ちゃいけないの？」

私はまだ子供だった。先生のいない時によからぬ想像をしても、こうして清潔感溢れる先生の顔を見ていると二人が『してはいけないこと』に関わるとはどうしても思えない。先生がアドバンテージを取らない限り、私からは何もできない。

若い独身の先生とこうして二人きりでいても何の危惧も持たないどころか、そんな男女の絡み合いは私の頭から不思議と綺麗サッパリ消えてしまう。

「やっぱりオレも男だし」

先生が視線を落としてポツリと漏らした。

「やあだ、そんなこと分かってますよ、先生が男だってことくらいいいえ、私は何も知っちゃいなかった。」

男の人の性欲が時に、それ自体が獰猛な獣になってコントロールが利かなくなっちゃうという哀しさも、それを押さえる為には全神経と精神をもって闘わなきゃいけないことも。

そういう意味で私の無知は残酷で非情だった。

私にとっての早坂先生は『聖なる恋人』であり、『清き偶像』だった。

まちがっても息を荒げ、肌に汗を浮かべて私に挑んでくる理性のない獣ではなかった。

この男の色香、漂うような先生を前にし、豪華な家具に囲まれた居間で、お茶、いやコーラを飲み、小さなプチフルを思わせるお菓子を食べながら、とりとめのないお喋りをする時が私にとって最大、最高の『ロマンチズム』の体现であり、先生はその舞台にあつて微塵の穢れもない完璧な恋人だった。

なんと私は『浪漫ちつく上等』な少女だったのか、それを今、思うと笑っちゃうし、これを読んでる読者の方々も呆れ返るばかりか、お退屈になってしまうということはわかるんだけど。

これがR18じゃなくてたったのR15なる小説だという事をくれぐれもお忘れなく。読者の幅を広げるにはこうするより致し方ありません。(つて急に時代劇言葉使つてどーするんだ)

先生はジャケットを着ると私をマンションの裏庭に誘った。

「こんな寒いのにやだなあ」

と言う私の手を引いて外へ出た。

「きつとだいぶ(雪が)積もってるよ」

先生は自分のマフラーで私の頭と顔の一部までぐるぐる捲いた。

「ミイラみたいだなあ、でもこれなら見られても大丈夫」

先生が絶対の安全を保証するみたいと言ったけど、私は心のどこかで先生は見られることを自分の為には心配してないように思えた。

誰もいないマンションの裏庭は木も池の縁も、ガーデンにあるベンチやテーブルにもこんもりと雪が乗っかっていて、いつも5階の先生の部屋のバルコニーから見る風景と違い、小さな銀世界が広がってた。

サクサクと音を立てて歩く庭にはまだだれも足跡をつけていない。まるで私たちだけのためにそつと残された白い空間。

「先生、綺麗ね。ここのお庭」

いい終わらないうちに冷たい雪の飛礫が私の顔面に当たった。

「痛って、」

私の怒った顔を見て先生がゲラゲラ笑ってる。

私は思いつきり大きい雪球を作って先生に向かって投げた。

雪球は惜しくも的を外れ木の枝に当たり、枝から落ちた雪がバサバサと先生の上に落ちた。

キラキラ光る雪片にまみれて笑ってる先生は子供みたいに無邪気で、私のほうがちょっとお姉さんのような気さえした。

「下手だなあ、津田さん　こうやって投げるんだよ」

むかってくる雪球を避けようとして積もった雪に足を取られる。

その私に容赦なく白い雪がかかる。

『あんたはSかい？』

先生は雪国育ちだから、このくらいの雪はなんともないのか何度か顔面ヒットを喰らっても可笑しそうに転がったり、私に雪の塊を何度も浴びせた。

私達は雪まみれになり溶けた雪が袖口や襟から沁みて冷たくなるまで遊んだ。

雪はその日、遅くなるまで降り続いた。

つづく

第14話（前書き）

葵は高校3年生になった。早坂先生との恋は友達の恋愛と比べ大っぴらにすることはできない。そんな内緒の恋愛の中で葵は心の葛藤を抱える。

第14話

私は先生を愛しすぎた。

初めて、こんなにも深く激しく、狂おしいほどの想いだった。

愛しすぎて私にはこれから先、他の人に分けてあげる愛など残らないと思った。十七歳という若さで自分の持っている愛の全てを捧げきった私は人の愛というものに限りがあるのでは、と考えてた。

限りがあるのであればいつか終わってしまう。

私は先生との恋愛が終わることなど考えたくはなかったけれど“終わらないという保障”などどこにもない。

恋愛などつきつめて考えれば二人の間の感情で成り立っているに過ぎず、人の感情ほど移ろいやすいものはないように思える。

形の無いものだけに、それはシャボン玉よりも容易く消えてしまう。私は先生を愛するほどにこんな怖れを抱くようになった。

先生と逢っている間だけ、そんな思いを頭から追い出すことができても、一人になるとフツと不安が私の心に忍び込んでくる。

それは消しても消してもやがて又ぽっかりと、忘れた頃に浮かび出てくるようなしづとさがあった。

“愛には恐れがない。 完全な愛は恐れをとり除く。…かつ恐れる者には、愛が全うされていないからである” （ヨハネの第一の手紙四章十八節）

聖書のおしまいに近いこの箇所を読んで完全な愛とはなんだろうと思った。

不安や恐れのない愛などがこの世に存在するのだろうか。

もしあるなら私はそんなふうに先生を愛し、その愛の中で生きたいと願った。

冬の寒さが次第に緩み 季節が変わっていくのを感じた。

春休みになり、先生は私を誘って湖へ行こうと言った。

“知ってる人に逢ったらどーしよー”という思いがなかったわけではないけど、先生のマンション以外の場所で二人きりで逢うなんて初めてだったからワクワクする気持ちの方が強かった。

重いコートを脱いで先生とお出かけするなんて、いつか先生に誘われて海へ行ったりきりではないだろうか。

あれから一年と経ってはいないのに私は自分がちよつと大人になったような気がした。

学年が上がったというのもあるけど、それよりも私には先生の存在に原因があるように思う。

誰かを愛すること、それは私にとって初めてではないと思っていただけれど、こんな深さで人を愛したことはなかった。

私は文字通り昼も夜も早坂先生のことを想い続けた。 先生が学校にいない日や、学校がお休みの日は、先生から電話が来ないかと、そればかりが気になった。

唯一、気を紛らわすのは絵を描いているときで、それに熱中している間は私の心は平和だった。木製の楕円形のパレットに新しく絵の具をチューブから絞り出し、様々な色を並べ、そこからモチーフを眼に映るのに限りなく近づけて描いていく時、私は平安に浸ることができた。そこにはあの熱情に翻弄される事もなく、自分一人の優雅な世界があつてひと時の休息を得ることができる。キャンバスの中は自分の思うとおりに事が運ばれていくのだ。

私はヒマさえ見つけてはその作業に熱中した。

人目を憚る交際だっただけに自然と先生の立場を思いやることを強いられた。

私一人が突っ走れば決して成り立たない関係であるのを初めからわかっていたし、人前で感情を隠さなければいけないことは何度もあった。

リサ子や麻里なんかは恋してても落ち着き払ってる。まるで手の中に小さなお守りでも持っていて、それをいつでも触って確かめることができるみたいに。

私はいつも不安を抱いていた。『教師と生徒』として“あるべき”距離感みたいなものを誰からともなく押し付けられ、それを取り除かなければ先生との間が埋まらないもどかしさ、自分の気持が性急で焦躁にかれているのがどうしてなのかを掴みきれない苛立ち。

それらが時折一気に膨れ上がり胸の中で沸々と煮え滾るような感覚。早坂先生が私に対する愛情を口にするたびに、どうにも埋められない自分の心の中の空洞が大きくなっていく気がした。

先生の私に対する気持に少しも疑いは持っていなかったけど自分が先生の愛情に十分に応えられない不器用さ、言葉の足りなさ、そのことによって自分がまだ一人前ではなく、まだ『女』になるには程遠いような感じがした。

そして哀しいことに、それは事実だった。

誰かの言に『人は女に生まれてくるのではなく、女に“なる”のだ』というのがあるけど、それはホントかもしれない。

15話（前書き）

葵は秘密の恋人、早坂先生と春休みにお出かけをする。
ボートの上で先生と二人きりになった葵は先生の胸に秘められた熱
い想いに触れるのだが…。

15話

桜の蕾がふくらみはじめ、その香りが春の空気に混ざってトロンとするような陽気が幾日も続いていた。

湖と言っても公園の中の一部にある大きな池で近くにベンチやキオスクがあり人は結構出ていた。

わたし達はソフトクリームを食べながら池の周りをお散歩した。

先生は水辺にたむろしているアヒルにエサをあげながら「津田さんもやってみる？」とエサの入った紙袋を差し出した。

「うん」

私がエサをやり始めると水の上を泳いでいたアヒルや鴨までやって来て

“ガアガアガッ！！！”

がつついてエサを取り合い始めた。

五、六羽だったのがいつの間にか十羽を超えた数になってアヒルの騒ぎは大きくなってる。中には私の足をつつかんばかりの奴までいる。

「ヒェッ！ やめてえ…あっち行って！」

アヒルを追い払えずに 逃げ回る私を先生は笑ってみてるだけだ。

私が先生にエサの袋を押し付けて、やっとアヒルは私から離れていった

強いアヒルにエサをとられてるアヒルに食べさせようと、先生は遠巻きにウロウロしているアヒルにエサを投じている。

「トロイ奴にはエサあげたくなくなっちゃうんだよね」と言っただけニコした。

ふっと胸の中が温かくなるような優しさ。

この日だって、いいえ、私とプライベートで逢う時は絶対先生のほうが負ってるリスクは大きいのにそんなことは一度も口に出さない。

私に重荷を感じさせないように私が先生のマンションへ遊びに行くのも帰るのも拘束しなかった。

滅多に乙女心を撥るようなコトも言わないし、しないけど先生の優しさは今まで私が出会ったどの人にもないものだった。

アヒルにエサをあげた後で私たちは船着場へ行きボートに乗った。

「アヒル型のボートに乗ろうか？」先生は言ったけど、アヒル攻撃に遇ったばかりの私は「イヤだ」と言い、普通の形のボートを借りることにした。

先生が漕ぐとボートはちゃあんと行きたい所へ進むのに、私の番になるとボートは他のボートにぶつかりそうになったりしてしまう。それでも先生は漕ぎ方を教えながら私にオールをとらせた。

「先生、私のどこが一番好き？」

ボートを漕ぎながら思い切って訊いてみた。

「ええっ？ そうだなあ」先生が少し考えるような顔になってから

「オレのまだ知らないところかな」含みのある眼差しで私を見た。

ドキッ！

先生が意味した『オレの知らないところ』：いつも先生に対してよからぬ、私がかなりオマセな想像をしていることを見抜かれてるように思い、恥ずかしさに頬が熱くなった。

「あはは……何を言ってるんですか、先生」

恥ずかしさを誤魔化した。

「夕べね、君のこと考えてたら眠れなくなっちゃった……って明け方にちゃんと寝たけどさ」

先生はオールを持つ手を止めて私を見つめた。

「えっ？」

あの雪の日に私を抱きしめた熱情はそれだったの？

今、先生の眼はそう言っている。幾度もその機会はあった筈なのに“禁じられた関係”の中では届きそうで届かない。

そんなもどかしさを胸にためているのは私だけだと思っていた。

「先生でもそんなコトあるの？」

「そんな風にみえない？」

「っていうか、先生は、私のコトどのくらい好きかなって時々心配になるの」

時々じゃなくてしょっちゅうなんだけど。

でも一応プライドあるし。

「大好きだよ、そんなことが心配なの？」先生が優しい目をむけた。

先生の手が私の手にふれた。

私の手をギュッと握り締めて先生が言った。

「愛してる…」

水面をやさしい風がふわりと通り先生の髪を少し乱した。

仄かなパフュームの匂いが私の心をかき乱す。

この人はこんなにも私を甘美な想いに浸らせる。

先生の胸に頭をもたせ掛け 水面を見つめながら私は先生のすべてに溺れそうだった。

いえ、溺れてました。

先生は私の両肩に腕を回して抱いた。

ボートの上で私を抱いたまま先生は言った。

「このままずっと君を抱いていたい」

私は先生の顔を見上げた。先生の熱を含んだ眼差し。

「先生」

その後は言葉が続かなかった。ただこうしていつまでも先生といたいと思った。

ゆっくりと私の体を離して先生が言った。

「オレ 君がどうしようもなく欲しくなるときがある。今こうして一緒にいるだけだって」

私も同じ気持ちだった。でもそれを口にするのははしたないような気がして黙っていた。

でも先生にはもっとと言って欲しかった…先生がどんなに私を求めて

いるか、どんな気持ちで私を抱いていたのか：いつそのこと何もかも忘れて激しく愛し合いたいと思った。

「でもさ、そんな時 自分が弱い奴だなんて思うんだ」

先生は苦笑した。

「そんなこと……」

ないよと私は言いたかった。みんなやってることじゃんと言いたかった。教師と生徒だっていうこと意外に何の妨げがあるのと私は言いたかった。

愛し合っていれば、お互いが求めていればそれでいいじゃん、最高じゃんと私は声を大にして言いたかった。なのに私は言えなかった。

先生はどうしたってどう転んだって教師で私は生徒なんだ。

こうして一緒にいるコトだって一応はいけないことなのに、その上抱き合ったり、その先までいっちゃったら先生は自責の念に捉われて身動きが取れなくなる。

挙句に先生の気持ちから私から離れていっちゃうかもしれない。

「オレは津田さんに対してそんな気持ちを持つのがイヤなんだ」

イヤだったって、それがふつーじゃん。

先生と私はどうしたって男と女なのだから。

「私が生徒だから？」

私は先生の眼を真っ直ぐに見た。

「いいや、君が生徒でなくてもオレはやっぱり同じように思う」
きっぱりとした口調だった。

先生があまりにも生真面目にものを考えてるので私はちょっとハスッパな風に言った。

「私、先生ならいいけど先生はイヤなの？」

ちょっと媚びるような上目づかいで先生を見た。

「そういう意味じゃなくて、だけど君のイノセントを今のオレが奪うってどうなんだろう。それが正しいことだとは思えないんだ。神様がそんなコトをOKって言うと思う？」

神様かあ。

神様がOKしてない事なんか私、山ぼどしてるよ。

「津田さんはオレのように神様を振りかざして善を唱えるのをバカバカしいと思う？」

先生は意外にも平然として言った。

「バカバカしいとは思いませんけど、それじゃあ自分の感情とか意志とかはどうなっちゃうんですか？ なんでも神様の云うとおりにしてたらリモコンで動くロボットと同じじゃないですか」

私は両手を後ろについて少し反り返り、つまらなそうに呟いた。

「リモコンのロボットかあ……ふうん、そんな風にも取れるか」

先生はニコニコしながらオールを手に取りボートを漕ぎ出した。

「ロボットはさ、そういう風にプログラムされてるだろ、リモコンの指令通りに。：壊れちゃえば別だけど。でもオレ達人間はそんな風にはできてない。もともと自由意志があって君の云うように感情だってある。理想や哲学、信仰だってある。人間には選択する自由があるから、たまたまある人は結婚していなくても“愛してれば”寝てもいいとか、“金で女を買う”ってことも合法ならいいじゃないか、と言う」

私の周りの友達や大人達は大抵そうだよ。

「けどいつも神様からのOKがもらえる選択しかないのだったら、それはやっぱりリモコンのロボットと大差ないんじゃないかな
：」

「するどい疑問だね。学校の勉強もそのくらい熱心だと成績上がるぞ」

「茶化さないでくださいよ、私、真面目に考えてるんですからね」

「ゴメンゴメン：津田さんがあんまりマジな顔してるから授業中もこんな風なのかなあ、なんてさ…」

「そんなこと今関係ないでしょ、はぐらかさないでちゃんと答えて

くださいよ」

先生は腕を組んで少し考えるような顔になった。

「セックスって神様からのギフトだって思う。それも結婚した男女の間にだけ許される特別な…それを踏み越えれば多かれ少なかれ人は傷つくようにできてるんじゃないかな。欲望が抑え切れずにプレゼントだけ先取りしてしまうケースもあるけど、そういうのって逆にせつかくのプレゼントをスポイルしちゃってるように思う。」

クリスマスのプレゼントをずっと前もって花見時にもらうような…」先生のアナロジーが可笑しかったので私は微笑んだ。

「じゃあお花見にプレゼントを開けちゃった人はクリスマスには何ももらえないの？」

「うーん、多分きれいに包装紙もリボンもかけてあって…でも箱を開けたら空っぽだった、みたいな」

「なくんだあ、つまらない」

「オレもそう思う。イヤだろ、そんなの」

私はついとりサ子とKさんのコトを思い出した。

リサ子はKさんとの子供を堕した時、泣いていた。

しばらくは、そして口には出さないまでも あの時のことは今でも辛い思い出として尾を引いているかもしれない。

また、タエコおばさんのお店でも時折お客さんや板前さんが異性関係の縛れから揉め事が起るときは大抵“深い仲”になってからの事だ。

「何となく先生の言うコトわかる」と私が言うと先生はにっこりして「なんか食べに行こうか？ 性欲は充たされないとしても食欲は満たさなきゃね」

二人を乗せたボートは春の日差しにキラキラと揺れる水の上をゆつくりと岸にむけて進んだ。

船着場にボートを返してから私たちは木洩れ日の差す公園の木立の中を並んで歩いた。

昼下がりのやわらかな空気につつまれて私は幸せな気持ちで先生の横顔を見た。

端正な目鼻立ちを意識するでもなく量の多いその髪をただボサボサと刈ってあるのを見て、私は先生ってかわいいな、と思った。

第十六話

先生と私は公園の裏にあったこじんまりとした和食のお店に入った。

夜は割烹料理のお店になる落ち着いた造りの店内は、畳のお座敷にどっしりとした黒檀のテーブルと品の良い染めの座布団が置かれている。

紅い和紙で作られた赤い提燈風の丸い照明灯が店内の所々に配置されていた。

中居さんに案内され座敷に着くと先生はどっかりとあぐらをかき、「歩いたから暑くなっちゃった」と言ってひよこ色のセーターを脱いで無造作に座敷に置いた。

Tシャツだけになった先生は筋肉の線がすっきりと出た白い腕を伸ばしてメニューを受け取った。

ふと、この腕の中に私は抱かれたんだと、さっきのボートの上の抱擁を思い出し、私は頬が紅潮するのを感じた。

「暑い？」先生が私の顔を見た。

「うん…」

「顔が赤いよ…」

「先生、ワークアウトかなんかしてるんですか？」

「うん、どうして？」

「先生って結構筋肉あるんだなって思ってた」

「ああ、大学ン時土建屋のバイトしてたから」

先生が照れくさそうに腕を撫でながら言った。

「先生が？　へえ、想像つかない」

「美大生なんて塾の講師や家庭教師にはまずお声は掛からなくて、そのワリに画材だとか制作費なんかで結構金は要るだろう、割のいいバイトって言えば肉体労働なんだよ」

旧家のお坊ちゃんです。育った先生が都会に出てきて土方をやっていたというのも意外だったけど、ツルハシやシャベルを振りかざして汗みどろになって働いてる先生を想像するとなかなかセクシーだなと思った。

「アトリエに籠もりつきりで青い顔して習作描いてるっていうの性に合わないのかもな」

そんなことを他人事のように暢気に話しながら先生はコップの水を一息に飲んだ。

先生は“春霞”、私は“雛御膳”という、いかにも季節にふさわしいお料理を注文した。

「先生、このお店とっても落ち着いてていい感じ。ちょっと大人になった気分」

私は店内を見回して言った。

「うん、季節感があっていいよね。津田さん今年は三年生だしこういうお店もいいかなって思ってた、ちょっともったいぶった店だけれどね」

「先生よく来るの？ここ」

「兄貴のお気に入りだし、日本的なものに飢えるらしいよ。外国にずっといるだろ」

「そっか、お兄さん御推薦ってわけね。じゃあ先生のお気に入りはどこ？」

「安くてうまいラーメン屋。でも初デートでそれじゃカッコつかないしな」

「初デート？ そっか、先生とこんなんしてお出かけて初めてなものね。」

そう考えるとドキドキしちゃう」

「毎日学校で会っていても？」

「うん、だって学校では教師と生徒でしょ。でも今日は私だけの先生だもの」

「やっぱり先生だよ、それじゃ」先生が笑った。

「ね、先生この日本画　すごく綺麗だまってさっきから思ってたの。誰の作品かしら？」

「鮮やかな牡丹だね、津田さんは日本画も好き？」

「部活では描いたことないけど、こんな華やかな色使いなのは好き。母が習ってるの、あまり上手くはないんだけど…」

「お母さんが？　ふくん、それで津田さんも絵を描くのが好きになったのかな」

「どうかなあ、私はもの心着いたときからクレヨン握ってるような子供だったから。他の子がおもちゃ買ってもらって喜んでるとき、絵の具や大きな画用紙ねだってるような子だったの。遊園地よりも美術館が好きっていうあまり可愛くない子供だったのね」

「なんかわかるような気がする」

「やっぱり先生も私のこと可愛くない子だって思う？」

「そんなことないよ、…でも変わってるって思った。　最初に会った頃ね」

「みんなそう言うの、『葵ちゃんは個性的ね』って。つまり『あんた変人だね』って言ってるのよ。慣れてるけどね」

「絵を描いているときの君って近寄りがたい雰囲気なんだよな。特に習作描いてる時、こうした方がいいんじゃない、とか言いたくなるけど言えないような」

「でも、先生は初めっから言っていましたよ…『この線はこう描いた方がいいよ』
なあゝんて」

「出だしで躓いてしまうと後まで君が苦手な生徒になりそうだったからさ」

「じゃあよかったのかな、ヘンな子で。　あの時先生が私のデッサンを直してくれたでしょ、私の傍に来て…その時から先生に恋したのよ」

私が言い終わると料理が運ばれてきた。

それはお膳といった方がふさわしいような、仰々しいプレゼンテーションで、目の前にこれでもかと次々に並べられてゆくお椀や色も形もとりどりの小鉢を見て、私はお公家さんのお姫様の食卓にでも着いている様な気分だった。

しかもフランス料理のようにフォークとナイフを一々選ばずに一対のお箸で全ての料理を食べられるという気軽さが私を有頂天にさせた。

「凄い御馳走ね先生、いただきます」

私が嬉々として箸を取ると

「お祈りをしなくちゃ」と先生が制した。

私はハッとして両手を合わせ、目を閉じた。

先生が笑いを堪えながら食前のお祈りしているのをしているのを聞きながら私は耳まで真っ赤になるのを感じていた。

「：アーメン」

純日本風の周囲の雰囲気“アーメン”というのはいかにもそぐわない気がしたが私は先生と一緒に祈りをしてから食べ始めた。

先生の“食前の祈り”は短くて

「神様この食事をお与えくださり感謝します。この糧により力と健康が与えられあなたの為に私達が用いられます様に」というものだった。

この祈りを先生の口から聞くのは初めてではなかったけれど他にも大勢の人がいる中でも毅然とした態度で祈る先生に私は少なからず感動した。

先生が祈った後、周りの人達の視線を私は感じた。

カソリックの信仰が通常である国々ではむしろ食前に祈るのは当たり前だけれど、日本のように“宗教”自体が特別なものとして見られがちな国では公共の場所で祈ることは意外に勇気の要ることではないだろうか。

ミニ懷石料理は見た目も色とりどりで美しかったけれど味もなか

なか凝っていた。

小鉢にかつきりと盛られたお造りは新鮮そのものだったし、小さな竹の籠に盛られた天ぷらはカラリと軽く、口に含むとふんわりと衣がとけるよう。

蒸し物は出汁がほどよく利いていてまろやかな味わいが口一杯にひろがるし……。私と先生は「おいしい、感激!」と、皿から皿へとほおばった。

「うん、見た目もいいけど味もなかなか凝ってるよね」先生は心から美味しそうに食べてた。

仲居さんがお茶を注ぎに来た。

「今日はお兄様はご同伴でないのですか」

仲居さんは聖也さんが此処を鼻屑にしていって彼はお店の女の子の人氣の的だと言う。

先生がお兄さんは海外出張中だと答えると

「ご帰国されたら是非一緒にいらして」と告げた。

「ああいう兄貴を持ってるオレの影がうすいんだよ」先生は苦笑した。

聖也さんは人目に立つほどのいい男だし、人をそらさないキャラクターなので何処へ行っても女性が放って置かない。

幸い歳が十以上も離れているのでガールフレンドを取り合うことはないけど、と先生はにっこりした。

第17話

お腹が一杯になった後、私達は散歩がてら街を歩いてから美術館へ入った。

ちょうど西洋モダンアート展が開かれていた。

広い展示場の壁にはズラリと絵画が掛けられていて、ピカピカに磨き上げられたフロアには彫刻が間隔を開けてバランスよく置かれていた。

両腕を組み難しい顔をして絵を観ている初老の男性の脇で先生と私は

「この絵、なんだと思う？」

「さあ、ちよつとわからないなあ」

「幼稚園児の落書きみたいだけど…」

「感情をぶつけたまま、みたいな所がいいのかもしれないな」
感想を述べながら順繰りに絵画を見ていった。

「ねえ先生、先生がモチーフを選ぶ人物ってどんな人なの？」

形も大きさもさまざまな彫刻の間を歩きながら私は訊いた。

「モデルになりたがる人」

サラッと答えが返ってきた。

「なんだ、それだけ？」

「うん」

「じゃあ、誰でもいいわけね」

「まあね」

「つまらないの、もっと深遠な理由で人物を描くのかと思ってた」
少なくともこの美術館に展示されている作品のアーティストはそうなんじゃないかと思う。

「仕事で依頼されて肖像描くこともあるからね。そういう時は製作料もらうから選り好みはしないよ」

「そういう意味じゃなくて、どんな人に創作意欲を掻き立てられる？」

「ああ、そういう事？ うーん…」

先生はちよつと考える表情になった。

「津田さんをモデルにしてみようか」

「え？」

「それなら創作意欲湧くけど、どう？」

今度は私が考える番になった。

つい、自分がグランド・オダリスクみたいにな裸になって長いすに横たわる図を想像してしまった。

「うーん…」

「イヤ？」

先生は私の顔を見た。

「それはダメ！絶対やめたほうがいいですっ！」

私は両手で恥ずかしさに紅潮した頬を覆った。

「どうしたの？ そんなにむきになって…」

「…。」

「あ、もしかしてオレがヌード描くとか思った？」

「…違うんですか？」

私はまたヘンな勘違いをしてしまったみたいだ。

「いや、描いてもいいよ」

「へっ…？」

「その代わり製作料うーんと請求しよう、教師クビになっても遊んで暮らせるくらいね」

笑いながら先生は言った。

絵画のモデルさんとゆうのは長時間同じポーズでじっとしていなければならぬシンドイ作業である。その上描き手にジロジロ見られるのだから初めのうちはかなり緊張する。

それは美術部で交代でデッサンのモデルをする時でも同じだった。

知った仲間同士であるだけにモデルになった生徒への注文もうるさい。

私はじっと同じポーズでいるのが苦手で麻里に何度も頭をポカリとされたことがある。

先生は笑って

「鈴木さんに小突かれたのかあ、なんか想像できるよ」

「麻里ってそういう子なんですよ、容赦なくネ」

「でも彼女、君に色々手助けしてくれてるよね」

先生がしたり顔で言うので私は驚いた。

「えっ？」

「君がオレと接近できるようにしたりさ」

「知ってたの、先生？」

先生は含み笑いをして

「なんとなくね…だから最初は面白いなと思って見てたんだ」

「先生って意外に人が悪いんですね。私と麻里のこと見え透いた手口使うなと思ってたんでしよう？」

私は自分のどうしようもない幼稚さを見透かされたようで恥ずかしかった。

「悪意はなかったけどさ、気まぐれなお嬢さんのクラッシュだと思っただよ」

「クラッシュ？　じゃあ知ってたんですね、私の気持ち…ずっと前から」

「同期の先生からそんな話聞いてたから。でも個人的にじゃないよ、一般論としてそういうこともある…みたいな」

「…で、先生どう思ったの、私のコト？」

「うーん、可愛い子だなって思ったけどそれ以上はね…あまり考えないようにした」

「でも海に誘ってくれたでしょう、あの時は？」

「魔が差したっていうのかなあ、なんだろう…教え子が飲み屋で酔っ払いの相手をしているよりは教師のオレと海へ行ったほうがいい

だろうっていう言い訳がポンとヒザの上に落ちたみたいな」

先生は釘やボルトをつなぎ合せて造られたよくわけのわからない彫刻の前で足を止めた。

『じゃあ飲み屋のバイトもあれで悪くはなかったのか』私は思った。もし私がタエコおぼさんの所で働いていなかったら、先生が私を海に誘うきっかけを与えることはなかったのだから。

「外にでようか」

先生は何か重要な事でも思い出したように言った。

美術館の外に出るとすこし肌寒く、日差しは既に西に傾いて空がオレンジ色に変わっていた。

肩から羽織ったスプリングジャケットの打ち合わせを私がかき合わせる、先生が寒くはないかと訊いた。

「うん…」

小さく頷いた私を先生はそっと引き寄せ、冷たい頬を先生の温かな手が包んだ。

第18話

早坂先生と私の視線が絡み合った。

心臓がドキドキして息をするのも苦しく感じるほどだった。

先生の手の温もりが私の頬を包み、私はそこから自分の体がジーンと火照ってくるのを感じた。

いよいよ来る…

私のファースト・キスが……。

私は全身の神経を口唇に集中し、息をひそめてその時を待った。

緊張で喉の奥が締めつけられるような気分だ。

口の中もカラカラに乾いてくる。

『目を閉じたほうがいいのかな…』

……。

先生の手が私の髪をそつと撫でて

「もう帰らないとね…」

ポツリと言った。

『へっ？ キスはどうしたの？』

私は先生の顔をぽかんと眺めた。

先生はくちびるを一文字にキリッと結んで普段の歩調で歩き出した。

『そうか…やっぱりそうだね…』

落胆に打ちひしがれ涙が溢れそうになった。

かといってその場で泣き出すわけにもいかなかった。

涙をグッと堪え、先を歩いていく先生に小走りで追いつこうとした。

私がすぐ横まで来ると先生は何も言わず私の手をぎゅっと握った。

『先生と私は所詮キスすることさえ許されない仲なのだ』

その確かすぎる事実を前に私はどうすることもできなかった。ただ切なくて、胸の奥の方から嗚咽がこみ上げてくる。

私の恋心はどんなに先生に抱きしめてもらっても優しくしてもらっても、さらに貪欲になるような気がした。

好きだという気持ち自身が自己増殖を起こしてどんどん膨らんでいく。しまいには心がパンパンになって張り裂け、木っ端微塵に破裂する。私は散り散りに散らばってしまった心の破片を夢中で拾い集めようとする。

なのに一つ拾うと手の中にあるもう一つの破片が指と指の隙間から零れ落ちてしまうような、そんな感じなのだ。

求めても求めても決して満たされない…。

けれどもそんな感情ををぶちまけるには先生はあまりにも平穩過ぎた。

授業中でも悪ガキ連中に対して声を荒げるようなことなど一度もなかったし、周囲がイラだったり騒いだりしていても一人平然としていてそれは傍で見えていて不思議なほどだった。

その先生に自分でも扱いかねるほどの激しい心の内を曝け出したら…。

おそらく先生は面食らってしまうにちがいない。

もしくは静かになだめられ、落ち着くようにと諭すだろう。

私は上手く受け取ってもらえない自分の感情が宙ぶらりんになっているのを収めることもできず、それが地面に落ちるのを見ているより他ないのかもしれない。

早坂先生にはそんな犯しがたい自制心が、生まれたときから植わっているように見えるところがあった。

『：愛のおのずから起るときまでは、ことさらに呼び起こすことも、
さますこともしないように』 ソロモンの雅歌二章七節

この言葉は叡知を極めたイスラエルのソロモン王が書いた愛の詩とも云われる雅歌の中に記されている。

早坂先生は私と交際している間、ずっとこの言葉を守り続けた。熱情に流されず自分を律しているのだと私にもわかるほどストイックだったのは、
先生が“愛し合っているから”というエクスキューズで体の関係を持つことを潔しとしないからだった。

教師と生徒だからという事実を超えて、先生は自分の信じている神様の前でいつの日か結婚するであろう私が清くあつていて欲しい、という切なる想いからだった。

生徒の私と交際していることは先生にとって気詰まりだったろうけど、私には罪悪感はありませんでした。それは早坂先生との間には少しも疚しいところがなく、寧ろ私はこの人と一緒にいることによってきれいなままでいられるという確信があったからかもしれない。

当時でもこんな形の男女の関わりはめずらしかったと思う。

世の価値観に惑わされず、神様の意志を自分の理想としながら相手の貞節を守るという選択をした先生の私に対する愛情は後になって広く深いものに感じられた。

早坂先生との恋は年月のカーテンが幾重にも重ねられた後もその光を失わずにいる。

私はあの頃の先生の年齢を遥かに過ぎ、何度か新しい恋に出会い別れたけれど、

あれほど光に満ちた恋愛にはついぞ出会わなかった。

それはあの頃の私が幼く純粹だったこともあるかもしれない。

二人が心の中に色々な想いを抱えながらも神様の前で素直でありたい、神様の目に小細工をしたくないという気持ちがあるどこかにあった為ともいえる。

教会堂のステンドグラスが真っ直ぐに光を通し、そのままの色彩と形を映すような、トランスパーレントな純粹さと正直さがあり、それを失わない恋だったのは先生が神様との約束を守ったためだったと知ったのはずい分後になってからのコトだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1120k/>

蒼いパレット

2011年10月27日13時01分発行